

福岡市埋蔵文化財調査報告書第274集

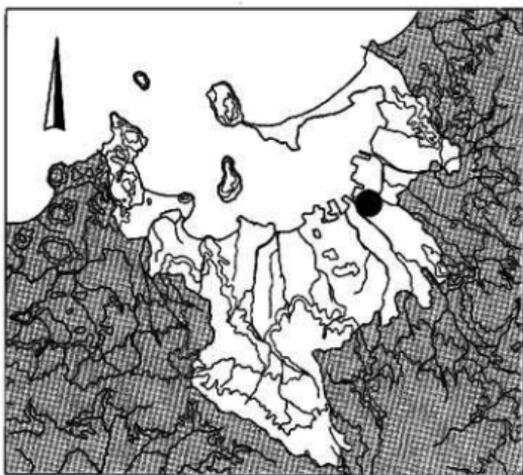
堅 粕 1

1992

福岡市教育委員会

かた かし
堅 粕 1

福岡市埋蔵文化財調査報告書第274集

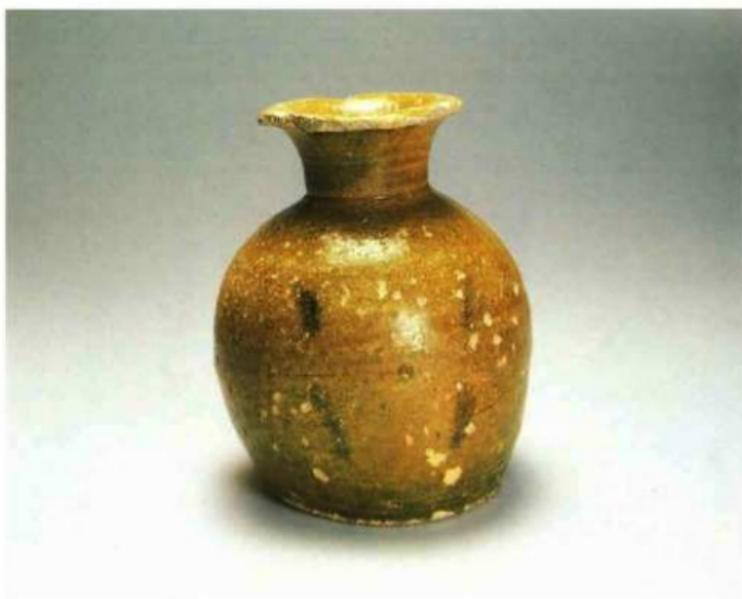


1992

福岡市教育委員会



第1図 堅粕遺跡群第4次調査地点全景（北東から）



第2図 第4次調査地点SX-036出土棘軸壺

序

現在、「海と歴史を抱いた文化の都市」、「活力あるアジアの拠点都市」として都市づくりを進めている福岡市には古くから大陸との交流を物語る遺跡が数多く存在します。本市では特に文化財の保護、活用に努めており、失われていく遺跡については記録保存のための発掘調査を実施しています。

今回報告する堅粕遺跡群は博多湾に面した砂丘上に展開した遺跡で、これまでの調査で弥生時代から中世にかけての遺構、遺物が発見されています。

本書は市営住宅建設に伴って実施しました堅粕遺跡群第3、4次調査の報告書であります。

本書が市民の皆様の文化財の認識と理解の一助となり、学術研究の資料になれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり数々のご協力を賜った関係各位と地元の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成4年1月13日

福岡市教育委員会 教育長

井口雄哉

本文目次

I. 堅粕遺跡群の概要	
(1) 堅粕遺跡群の位置と環境	1
(2) 堅粕遺跡群の調査	2
II. 第3次調査の報告	
(1) 調査経過	3
(2) 発掘調査の組織	3
(3) 立地と環境	5
(4) 調査概要	6
(5) 遺構及び出土遺物	8
1) 遺構図・包含層出土遺物	8
2) 土城説明	15
3) 土城出土遺物	35
4) 攪乱土城 (SX)	44
5) 攪乱土城及び pit 山土遺物	45
6) 井戸 (SE)	46
7) 井戸出土遺物	49
8) 溝	49
(6) 小結	50
III. 第4次調査の報告	
(1) 調査経緯	51
(2) 調査組織	51
(3) 調査の記録	52
1) 調査の概要	52
2) 竪穴住居跡 (SC)	55
3) 土坑 (SK)	57
4) 墓 (SX)	65
5) 溝 (SD)	73
(4) 小結	76

はじめに

1. 本書は、昭和63年度から平成2年度の間に、福岡市教育委員会がおこなった、堅粕遺跡第3次及び第4次の発掘調査の成果報告書である。
2. 本書の執筆は、各調査の担当者がおこなった。
3. 発掘調査・整理報告は、第3次調査を井沢洋一、第4次調査を山口謙治・菅波正人がそれぞれ担当した。
4. 本書で用いた方位は磁北である。
5. 今回報告した資料は、すべて福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵管理する予定である。
6. 第Ⅱ章について
 - i. 本書に掲載した遺構の実測は、吉田扶希子、福田小菊、西嶋彰子、多田映子、井沢洋一が行った。遺物の実測は吉田、中西番、田中昭子、井沢による。
 - ii. 遺構、遺物の製図は、中西、牛房綾子、吉田、井沢が行った。
 - iii. 本章で使用した写真は井沢が撮影した。
7. 第Ⅲ章について
 - i. 遺構番号は検出順に番号で付け、番号の前に遺構種を示す略号を付けた。竪穴住居跡→SC、土坑→SK、溝→SD、墓→SX。
 - ii. 本書で使用する遺構実測図は山口謙治、菅波正人、大塚恵治、石本恭司、岡崇、柳沢竜広が作成した。
 - iii. 遺物実測及び遺構、遺物の図面の製図は林田、菅波が行った。
 - iv. 本書で使用する遺構、遺物の写真は山口、菅波が撮影した。
 - v. 遺物の整理、報告書作成に関しては有島美江、上田保子、太田順子、品川伊都子、山田由美子の協力を得た。
 - vi. 本章の執筆は山口と協議のうえ、菅波が行った。

各調査の要目一覧を以下に掲げる。

遺跡調査番号	9010	遺跡略号	KKS-3
調査地	博多区吉塚一丁目1-4他		調査担当 井沢洋一
用途面積	3,000㎡	調査面積	845㎡
調査期間	1990年5月14日～6月30日		事前審査番号

遺跡調査番号	9054	遺跡略号	KKS-4
調査地	博多区吉塚一丁目568-2他		調査担当 山口謙治・菅波正人
用途面積	3,233㎡	調査面積	1,600㎡
調査期間	1990年12月19日～1991年3月30日		事前審査番号 2-1-2

挿 図 目 次

第1図	堅粕遺跡群第4次調査地点全景(北東から)	
第2図	第4次調査地点SX-036出土緑釉甕	
第3図	堅粕遺跡群各調査地点の位置(1/10,000)	
第4図	堅粕遺跡群の位置(1/50,000)	1
第5図	堅粕遺跡第1次調査出土貨泉(1/1)	2
第6図	調査地点位置図(縮尺1/5000)	4
第7図	堅粕第3次調査の範囲図(縮尺1/500)	6
第8図	堅粕第3次調査遺構配置図(縮尺1/200)	7
第9図	遺構面・包含層出土遺物実測図①(縮尺1/3)	9
第10図	遺構面・包含層出土遺物実測図②(縮尺1/3)	10
第11図	遺構面・包含層出土遺物実測図③(縮尺1/3)	11
第12図	遺構面・包含層出土遺物実測図④(縮尺1/3)	12
第13図	土壇SK01~06・11・15実測図(縮尺1/40)	16
第14図	土壇SK12・13・16~21実測図(縮尺1/40)	19
第15図	土壇SK22~27実測図(縮尺1/40)	21
第16図	土壇SK28・31~36・38実測図(縮尺1/40)	22
第17図	土壇SK39A・B~45・47実測図(縮尺1/40)	23
第18図	土壇SK48・51・53実測図(縮尺1/40)	26
第19図	土壇SK49・54~58実測図(縮尺1/40)	27
第20図	土壇SK59・62・63・65・69実測図(縮尺1/40)	29
第21図	土壇SK66・67・70B・71B実測図(縮尺1/40)	31
第22図	土壇SK71A・72実測図(縮尺1/40)	32
第23図	土壇出土遺物実測図①(縮尺1/3)	36
第24図	土壇出土瓦類実測図(縮尺1/3)	39
第25図	土壇出土遺物実測図②(縮尺1/3)	40
第26図	土壇出土遺物実測図③(縮尺1/3)	41
第27図	土壇出土遺物実測図④(縮尺1/3)	42
第28図	土壇出土遺物実測図⑤(縮尺1/3)	43
第29図	攪乱土壇内出土遺物実測図(縮尺1/3)	44
第30図	井戸SE01実測図(縮尺1/40)	45
第31図	井戸SE08実測図・土層図(縮尺1/60・1/40)	46
第32図	井戸内出土遺物実測図(縮尺1/3)	47
第33図	瓦井戸SE02~04・07実測図(縮尺1/40)	48
第34図	溝SD01土層図(縮尺1/20)	50

第35図	堅粕遺跡群第4次調査地点周辺測量図(1/1000)	52
第36図	北側調査区全景(西から)	55
第37図	調査区遺構検出状況(東から)	55
第38図	調査区全景(東から)	56
第39図	調査区全景(西から)	56
第40図	SC-104遺構実測図(1/60)	57
第41図	SC-104完掘(南から)	58
第42図	SC-104出土遺物実測図(1/3、1/2)	58
第43図	土坑(SK)遺構実測図1(1/40)	60
第44図	土坑(SK)遺構実測図2(1/40)	62
第45図	土坑(SK)遺構実測図3(1/40)	62
第46図	土坑(SK)出土遺物実測図1(1/3)	65
第47図	土坑(SK)出土遺物実測図2(1/3、1/2)	66
第48図	SX-030遺構実測図(1/40)	67
第49図	SX-030出土遺物実測図(1/3)	68
第50図	SX-030完掘(東から)	68
第51図	SX-034遺構実測図(1/40)	69
第52図	SX-034出土遺物実測図(1/2)	70
第53図	SX-034遺物出土状況(西から)	71
第54図	SX-034遺物出土状況(南から)	71
第55図	SX-034完掘(東から)	71
第56図	SX-034遺物実測図(1/40)	72
第57図	SX-036出土遺物実測図(1/3、1/2)	73
第58図	SX-036出土遺物	73
第59図	SX-036完掘(北から)	74
第60図	SX-036遺物出土状況(北から)	74
第61図	SX-036出土遺物(北から)	74
第62図	溝(SD)遺構配置図(1/300)	76
第63図	SD-017、019、025、037完掘(北から)	77
第64図	SD-017、025出土遺物実測図(1/3)	77

表 目 次

第1表	土坑一覧①・②	33~34
-----	---------	-------



第3圖 聖柏遺跡群各調査地点の位置 (1/10,000)

- HZK 新崎遺跡群
 - YZS 吉塚本町遺跡
 - KKS 聖柏遺跡群
 - YSZ 吉塚遺跡群
- (1~4 各次調査地点)

I 堅粕遺跡群の概要

(1) 堅粕遺跡群の位置と環境

博多湾は、外海からと、陸部からとを共に島嶼の間、あるいはそれらと半島との間に形成された砂州により境されている。後者はまた、背後の丘陵地との間に広い後背湿地を形成している。

堅粕遺跡群は、このうちの博多湾奥の砂州上に立地しているのだが、その砂州は、那珂川、御笠川、宇美川を主とした河川からの土砂が、荒津、名島という丘陵突出部を起点に弧状に堆積したものである。那珂川は、この砂州を貫いて堅粕遺跡群の立地する位置より西で博多湾に流れ込み、御笠川は、往時には一旦西に流れ、それと合流して湾に至っていたものとされる。宇美川は砂州の背後を東に迂回し、その北端部で多々良川と合流して湾に注ぐ。砂州上には、

一帯の都市化の進行している時点でも、比高1mを前後する凹凸が帯状に残されていた(第3図)。いままで述べた区域を含んだ、福岡平野の前縁をなす砂州上は、埋蔵文化財が意識されるようになった時期にはすでに開発が進み、その往時の景観を知ることが難しくなっていた。ところが、比較的近い時期に、都市部の再開発が盛んになるにつれて、こういった区域に、発掘調査の手を入れることができるようになってきた。再開発は、経済的な比重に従って進められたので、その地点が集中することとなった(博多遺跡)が、公共の再開発事業を中心に、周辺地域へも拡大している。そういった部分に堅粕遺跡群が含まれているといえる。

この、河川と海とに囲まれた微高地上に立地する遺跡は、元寇防塁を別すれば、西から博多遺跡群、堅粕



第4図 堅粕遺跡群の位置 (1/50,000)

- | | |
|---------|----------|
| 1 堅粕遺跡群 | 4 吉塚本町遺跡 |
| 2 博多遺跡群 | 5 箱崎遺跡群 |
| 3 吉塚遺跡群 | |

遺跡群、やや内陸に寄って吉塚遺跡群が周知化されていた（福岡市文化財分布地図 中・南部、東部Ⅰ）。ところが、前述のような、文化財を巡る状況の変化により、これらの範囲を越えて埋蔵文化財の包蔵地が確認される機会が多くなり、現時点では、遺跡をどのような範囲で捉えるか、という問題を別にすれば、堅粕遺跡の北に吉塚本町遺跡、箱崎遺跡が新たに確認、範囲を推定されている。

(2) 堅粕遺跡群の調査

堅粕遺跡群における現在までの調査の状況を以下に述べる。

第1次調査地点 博多区千代一丁目地内に所在する。住宅改良工事に先立って記録保存のための調査をおこなった。

発掘調査は、昭和63年7月11日から同8月28日の期間でおこない、用途面積747㎡のうち、360㎡を調査した。調査地は砂州の高まりの最高所の南斜面に立地する。調査区のほとんどは新しい時期の崖穴等で攪乱されており、調査区北壁に沿った一部で包含層と上城を調査したのみである。出土遺物は総量コンテナにして1.5箱ほどである。弥生時代後期末の土器が殆どで他の遺物は痕跡程度に、古墳時代後期、中世の資料を含んでいるのみである。

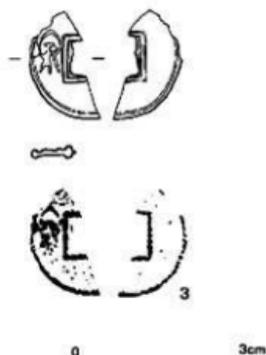
ただ、採集資料であるが、第5図に示すように「貨泉」の資料1点が出土している。調査区中央北寄り包含層近くの攪乱除去作業中に出土した。1/3程の破片である。全体を鏽に覆われて、淡緑色を呈す。銘のうち「泉」を残す。面郭、背郭を有す。計測可能な部位は郭辺長であるが、それは高倉洋彰氏（1989）による計測値6.25mmを測る。郭厚は今回の計測で1.23mmを測る。

第2次調査地点 第1次調査地点と同じ高まりの並びに位置する。平成元年度に民間のビル建設に先立って、記録保存のための発掘調査を実施した。調査面積565㎡で、古墳時代前期の方形周溝墓2基のほか土城墓17基、溝1条、奈良時代の上城などが調査されている。

第3次調査地点 本書で報告する。吉塚遺跡に面した斜面上に立地する。

第4次調査地点 本書で報告する。第3次地点に隣接して東に位置する。

高倉洋彰 1989「下葬儀の流入と流通」九州歴史資料館研究報告 第14集 pp.1-44



第5図 堅粕遺跡群第1次調査出土貨泉 (1/1)

Ⅱ 第3次調査の報告

(1) 調査経過

当該地は御笠川右岸の砂丘上に立地し、現在の標高は約4mを測る。砂丘の両側の緩く傾斜した地形に遺跡は形成されている。

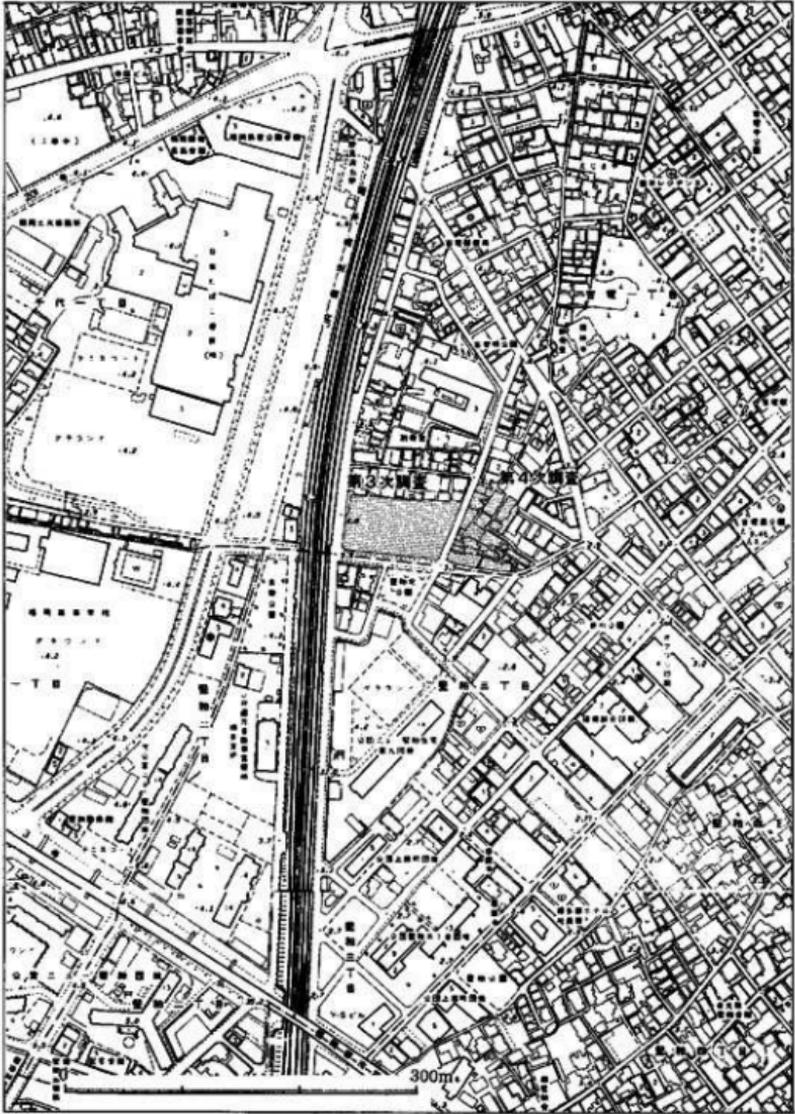
当該地には昭和30年代に市営住宅6棟が建設されており、今回はこれらの建物の老朽化に伴ない高層の住宅に改築されることになったため発掘調査を実施した。当該地の東側には第4次調査地が位置している。

試掘調査では、後世の擾乱により遺構の遺存状態が悪いと判断されており、調査対象面積を540㎡に限定されていた。調査の進行に伴い、事業予定地全域に遺跡が遺存する可能性がでてきたため、発掘調査の終了間際に遺構の分布状態を再度確認したところ、遺跡が事業地の東側まで分布することが判明した。この結果によって第3次調査が実施される契機となった。

(2) 発掘調査の組織

調査委託	福岡市建築局住宅改良課
調査主体	福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課
調査担当	柳田純孝（課長） 柳沢一男（第2係長） 松延紘文（庶務担当）
試掘調査担当	佐藤一郎 常松幹雄
発掘調査担当	井沢洋一（文化財主事）
調査協力	有吉富上人、井上八郎、神田宏太郎、船越康彰、山口孝、横尾泰広、吉川春美、吉原一彰、雲竜富美子、荻野敦子、小山田緑、菊田映子、倉光京子、栗木和子、坂本ハツ子、塩川允子、高野タエ、多田映子、谷吉美、永井鈴子、西口キミ子、西嶋彰子、箱田香代子、久田弘法、福田小菊、堀タケ子、吉田扶希子
整理作業	吉田扶希子、福田小菊、倉光京子、多田映子、坂本ハツ子、小山田緑、荻野敦子、西嶋彰子、田中昭子、中西香、牛房綾子

なお、今回の発掘調査にあたっては町内会長の松尾又五郎氏に多大なご協力を賜った。



第6圖 調査地点位置圖 (縮尺1/5000)

(3) 立地・環境

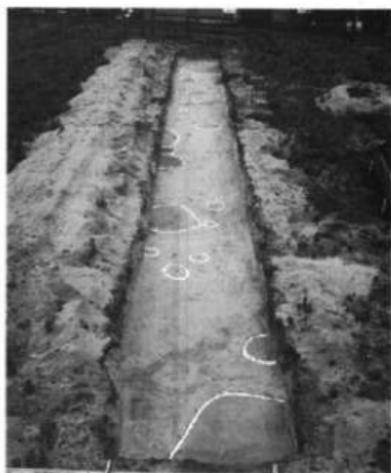
当該地は御笠川右岸の砂丘上に立地し、現在の標高は約4mを測る。砂丘の頂部を中心として堅粕遺跡は分布しており、当該地は砂丘の南側の緩く傾斜した地形に位置する。調査地点の西側は鹿児島本線によって区切られ、東側には第4次調査地点が隣接している。戦国時代に石



第3次調査区全景（東から）



調査区東側No.1トレンチ（東から）



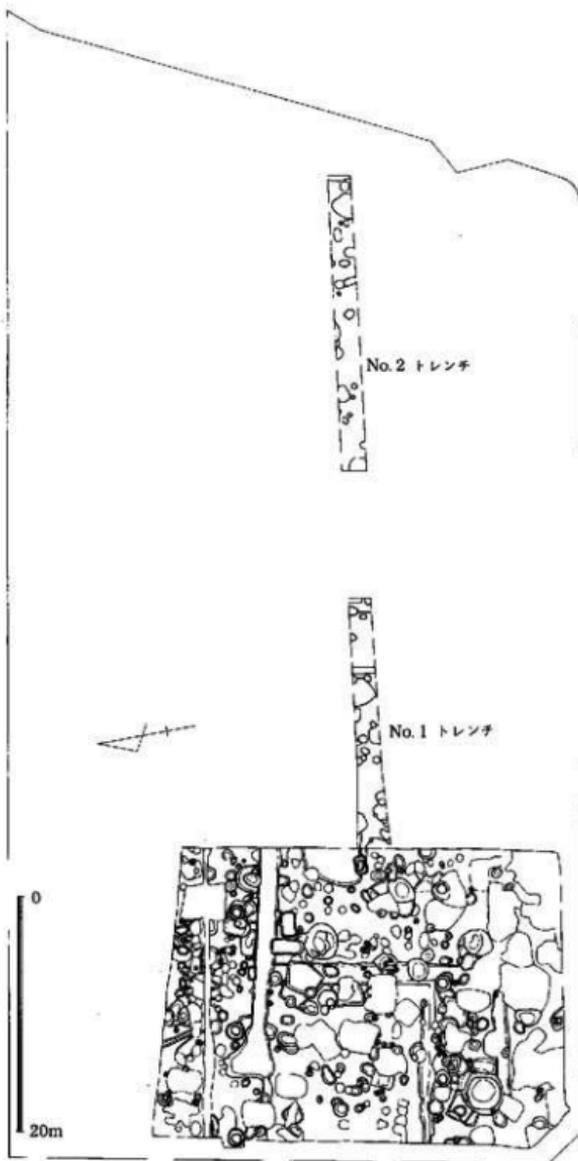
調査区東側No.2トレンチ（西から）

堂川（御笠川）が開削されるまでは古代の博多と密接な関連をもっていたものと考えられる。当該地は戦後に市営住宅が建設されるまでは、西林寺の基所であったといわれる。

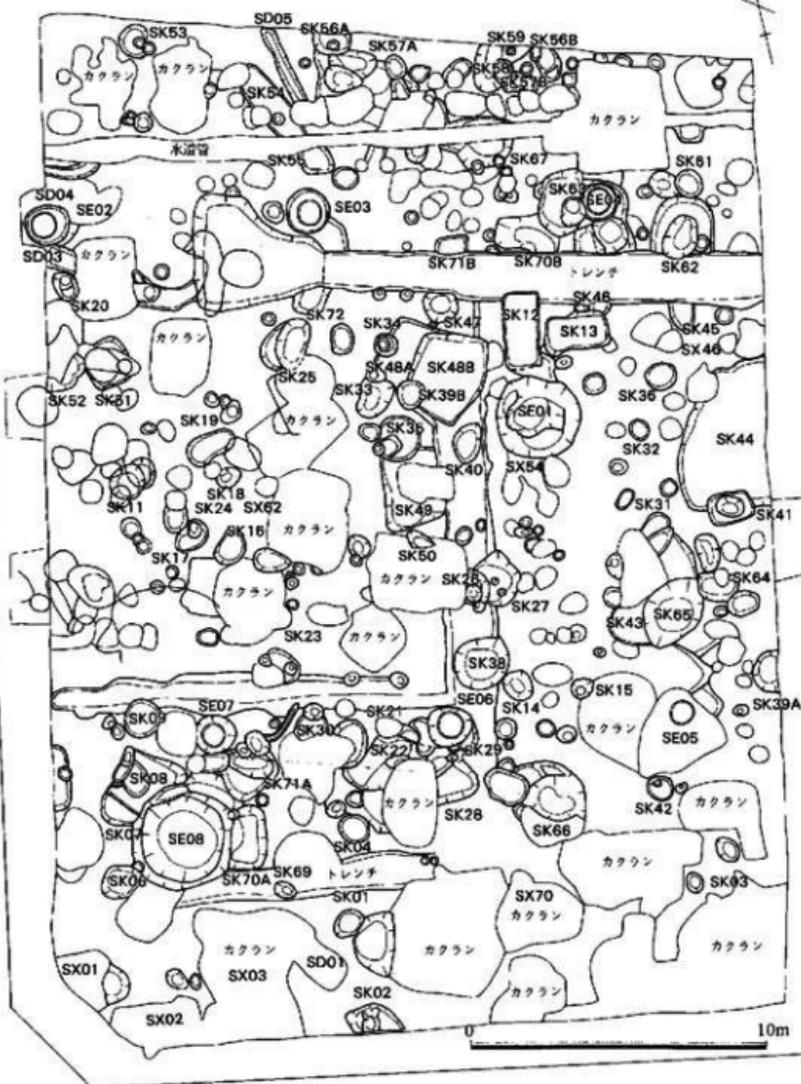
(4) 調査概要

遺跡は近世・近代の擾乱が著しく、遺構面は非常に荒れていた。調査の結果、遺構は事業予定地全域に遺存すること、遺構面は2面存在することが判明した。

土層は上から順に第1層表土、第2層暗黄褐色粘質土、第3層黄褐色砂、第4層灰白色微砂である。表土は近代の整地層で、深さは20~40cmを測る。第2層の暗黄褐色砂質土には粘土粒子を多く含んでおり、締りは良い。深さは約10~20cmを測る。この層は西側のみ存在し、トレンチNo. 2では存在しないの



第7図 聖柏第3次調査の範囲図（縮尺1/500）



第8図 聖柏第3次調査遺構配置図(縮尺1/200)

で、事業地の東側が削平を受けていることを示している。この上層内には6～10世紀代の須恵器や土師器の坏身・蓋・甕等の破片を含んでいる。この層は古代の整地層と考えられ、第1面の遺構はこの層の上面から掘り込まれている。遺構の覆土は黒褐色砂質土又は暗灰褐色砂質土である。この整地層上面で検出した遺構には土壇、井戸、pitがある。第3層の黄褐色砂は地山の第4層灰白色微砂層上面に薄く乗っている。

この第3層又は第4層上面においても遺構が存在しているが、調査期間の都合にて平面プランの一部を確認するにとどまった。遺構は隅丸長方形や円形の土壇とpitが存在する。覆土は暗灰褐色砂質土である。遺物などは検出できなかった。

今回の調査で検出した遺構の時代は奈良時代～江戸時代に及び、奈良～平安時代の土壇74、竪穴状土壇2、井戸2、近代の土壇、近世の瓦井戸等を検出した。遺物は古墳時代～江戸時代に及び、須恵器、土師器の他、陶磁器や瓦片、土師質土器などが出土した。古墳時代は須恵器坏身・蓋・甕・高坏・平瓶・甕片等が、奈良～平安時代は須恵器坏・蓋・甕・壺片の他、土師器の坏、椀、内黒土器、軒平瓦、平瓦、瓦埴片、曲物がある。近世の遺物には伊万里、唐津系の陶磁器、土師質土器の鍋・鉢・焙烙がある。

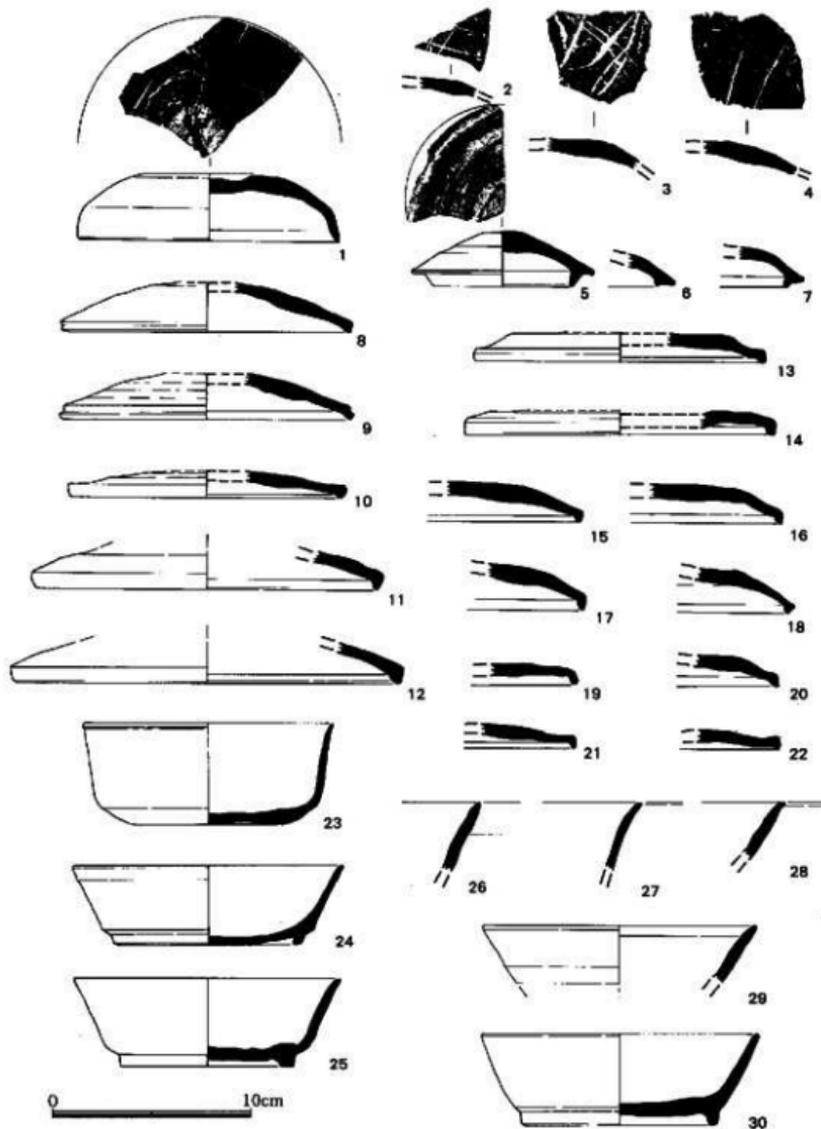
(5) 遺構及び出土遺物説明

1) 遺構面・包含層出土遺物 (第9～12図)

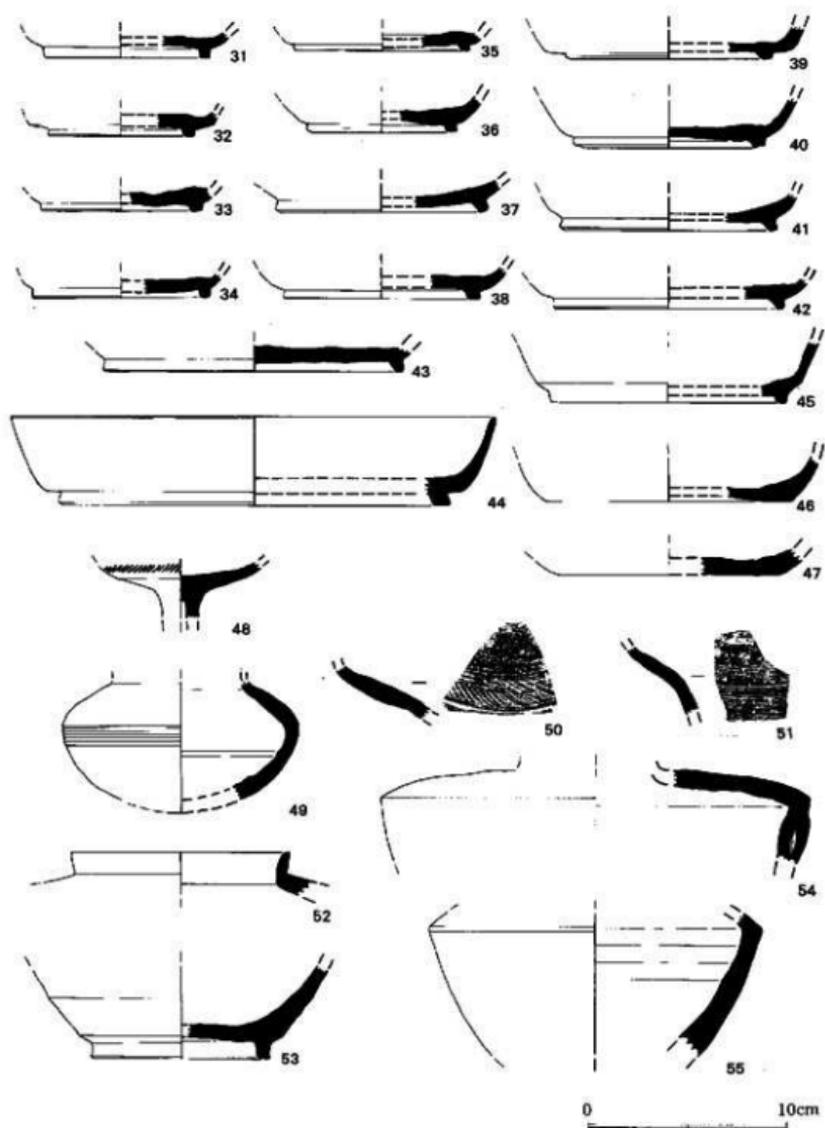
整地層及び遺構上面から出土した遺物を一括して報告する。

古墳時代の遺物のうち、須恵器は第9図1～7、第10図46～51、第11図56・58～62・64～69である。第9図1～7は坏蓋で、1～5にはヘラ記号がある。1は復原口径13.4cm、器高3.1cmを測る。5～7は内側にかえしを有しており、5の復原口径7cm、器高2.8cmを測る。第10図48は高坏で、坏部の下位外面に櫛状工具による列点文を施している。49は甕の体部片で、最大胴径12cmを測る。外面に櫛描き条痕を施す。50は壺又は甕の肩部で、外面に沈線1条と櫛状工具による列点文を施す。46・47・51は平瓶片であろう。体部外面に条痕を施す。甕は第11図56・58～62・64～69である。56・60は口縁部外面を肥厚させ、下位に突帯を廻らす。58は薄手の作りで、口縁端部下位に小さな突帯を付けている。59は小型の甕で、内面は青海波の当て具痕、外面は胴部下位にケズリ痕を残している。甕の破片には外面の叩きに、格子目叩き(61・64・65・67)、条痕状の叩き(62・66・68)、平行叩き(69)があり、内面の当て具痕には青海波状(61・62・67～69)、同心円状(64・66)、車輪状(65)の痕跡が残っている。

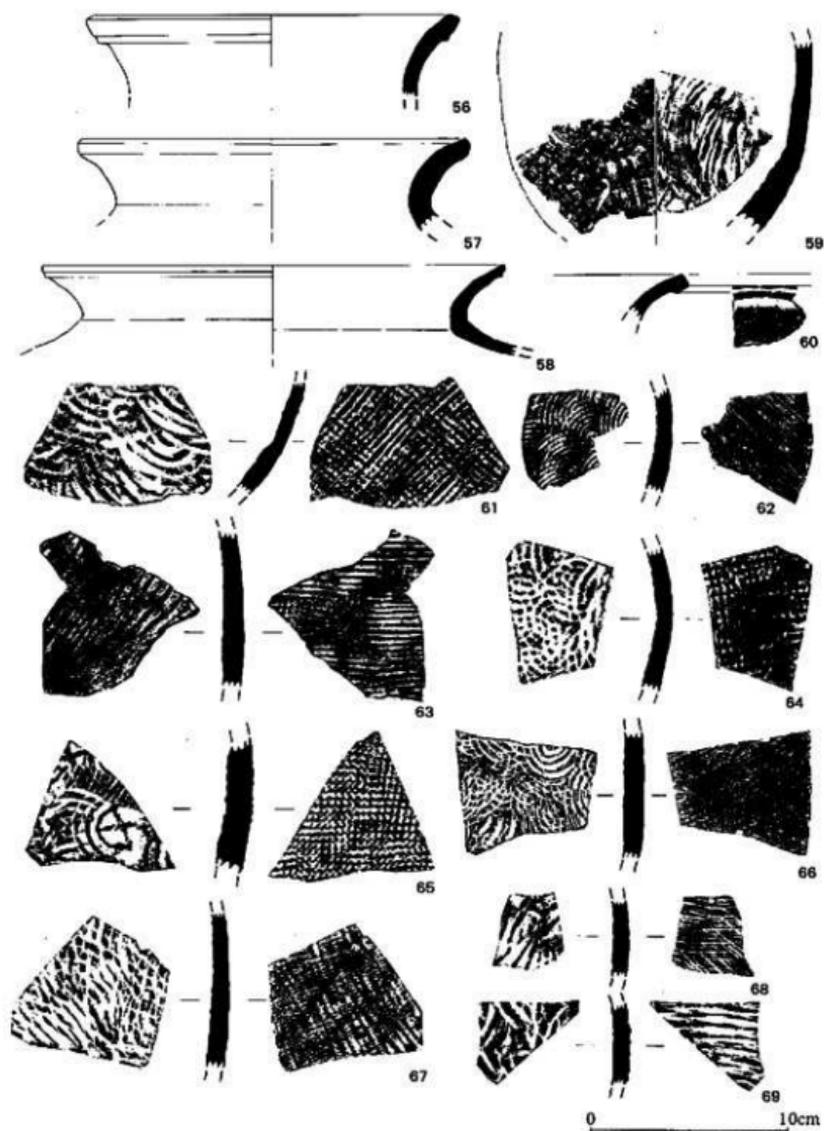
奈良～平安時代の遺物は第9図8～30、第10図31～45・52～55、第11図57・63、第12図70～86である。第9図8～22は蓋で、いずれも破片から復原した。口縁端部を折り曲げるもの、肥厚させるもの、つまみ出すものの3つのタイプがある。つまみは疑似宝珠形である。8～14の復



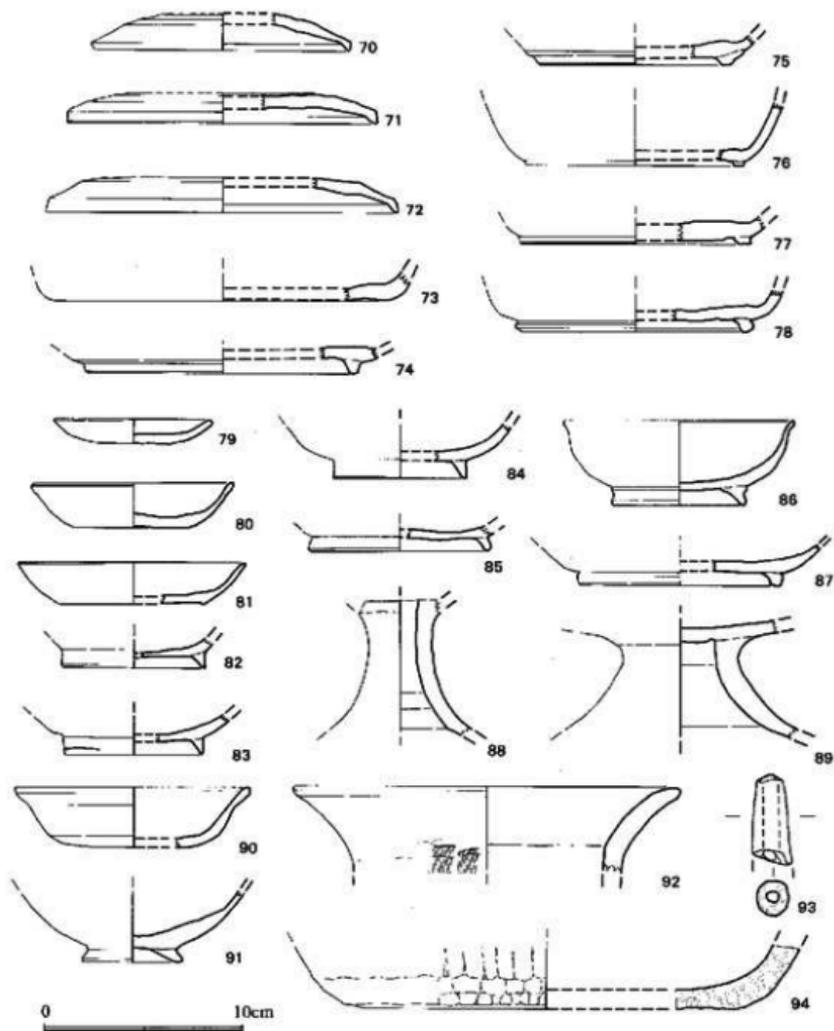
第9圖 遺構面・包含層出土遺物実測図①(縮尺1/3)



第10图 遺構面・包含層出土遺物尖湖岡②(縮尺1/3)



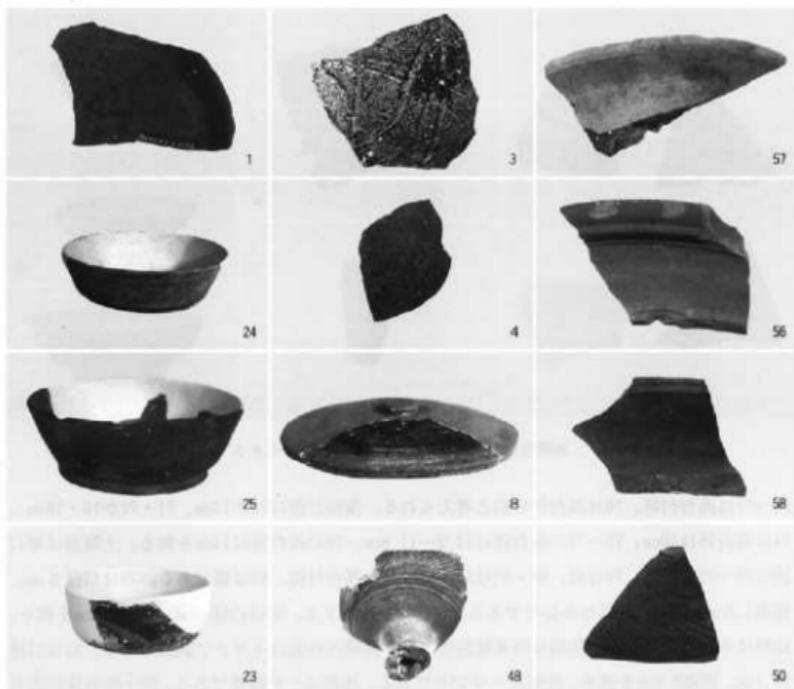
第11圖 遺構面・包含層出土遺物実測図③(縮尺1/3)



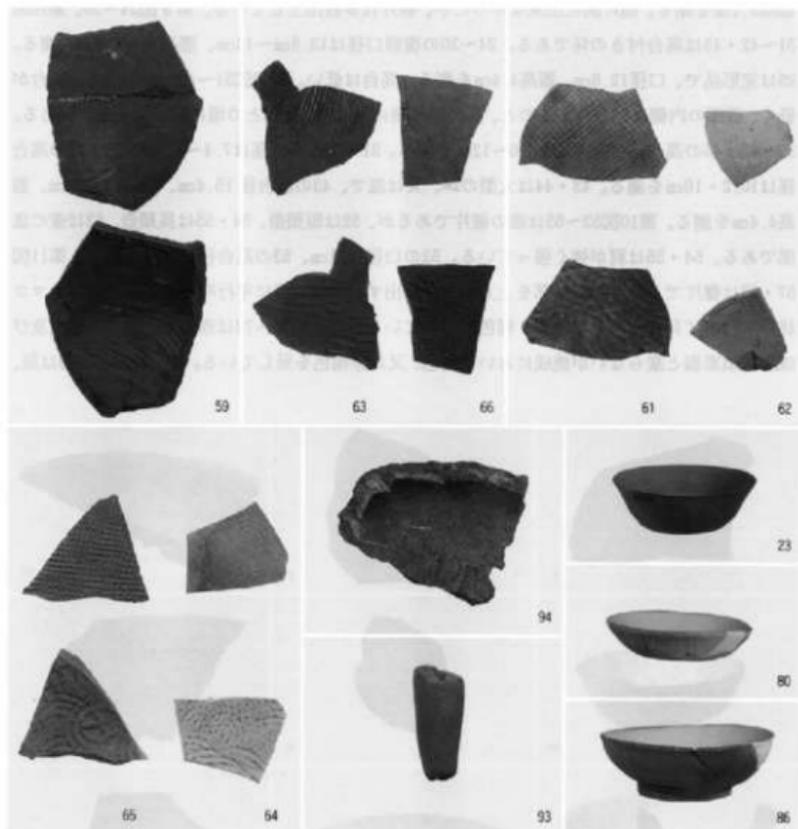
第12図 遺構面・包含層出土遺物実測図④ (縮尺1/3)

原口径は14~14.5cm、11・12の復元口径は17.2cm~19.5cmを測る。第9図23~30、第10図31~42・45は坏である。第9図23は高台を有しないもので、焼き歪みが著しいが、復元口径13.1cm、

器高5.1cmを測る。他に図化出来なかったが、破片は多数出土している。第9図24~30、第10図31~42・45は高台付きの坏である。24~30の復原口径は13.8cm~14cm、器高4~4.6cmを測る。25は完形品で、口径12.8cm、器高4.4cmを測る。高台は低い。第10図31~42・45のうち、高台が低く、底部の内側に貼り付くものと、高台が外側に張って、体部との境に貼り付くものがある。39~42・45の高台径は大きく、8.6~12cmを測る。31~36の高台径は7.4~9.0cm、37・38の高台径は10.2・10cmを測る。43・44は大型の坏、又は皿で、43の高台径15.4cm、44は口径20cm、器高4.4cmを測る。第10図52~55は壺の破片であるが、52は短頸壺、54・55は長頸壺、53は壺の底部である。54・55は肩が強く張っている。52の口径は11cm、53の高台径は9cmを測る。第11図57・63は甕片で、57は口縁端部を上方へつまみ出す。63は外面に平行叩き痕を、内面にナマコ状の平行当て具痕を残している。褐色を呈している。第12図70~78は赤焼け土器で、胎土及び成形は須恵器と変らないが焼成において褐色、又は赤褐色を呈している。70~72は蓋、73は皿、



遺構面出土遺物 ※番号は実測図番号と一致する



遺構面出土遺物 索番号は実測図番号と一致する

74~77は高台付坏, 78は高台付の皿と考えられる。復原口径は70が13cm、71・72が16・18cm、74の高台径は10cm、75~77の高台径は11.2~11.8cm、78の高台径は14cmを測る。土師器は第12図の79~92である。79は皿、80・81は坏、82~87は高台付碗、92は甕である。79は口径8cm、器高1.2cmを測る。底部は糸切りである。明赤褐色を呈する。80は口径10cm、器高2.4cmを測り、底部は糸切り底である。色調は暗茶褐色である。体部内外面はヨコナデ調整である。81は口径11.1cm、器高2.2cmを測る。底部はヘラ切りである。体部はナデ調整である。82・83の復原高台径は6.8~7.2cmを測る。86は口径11.8cm、器高4.2cmを測る。体部は丸味をもち、口縁端部はわ

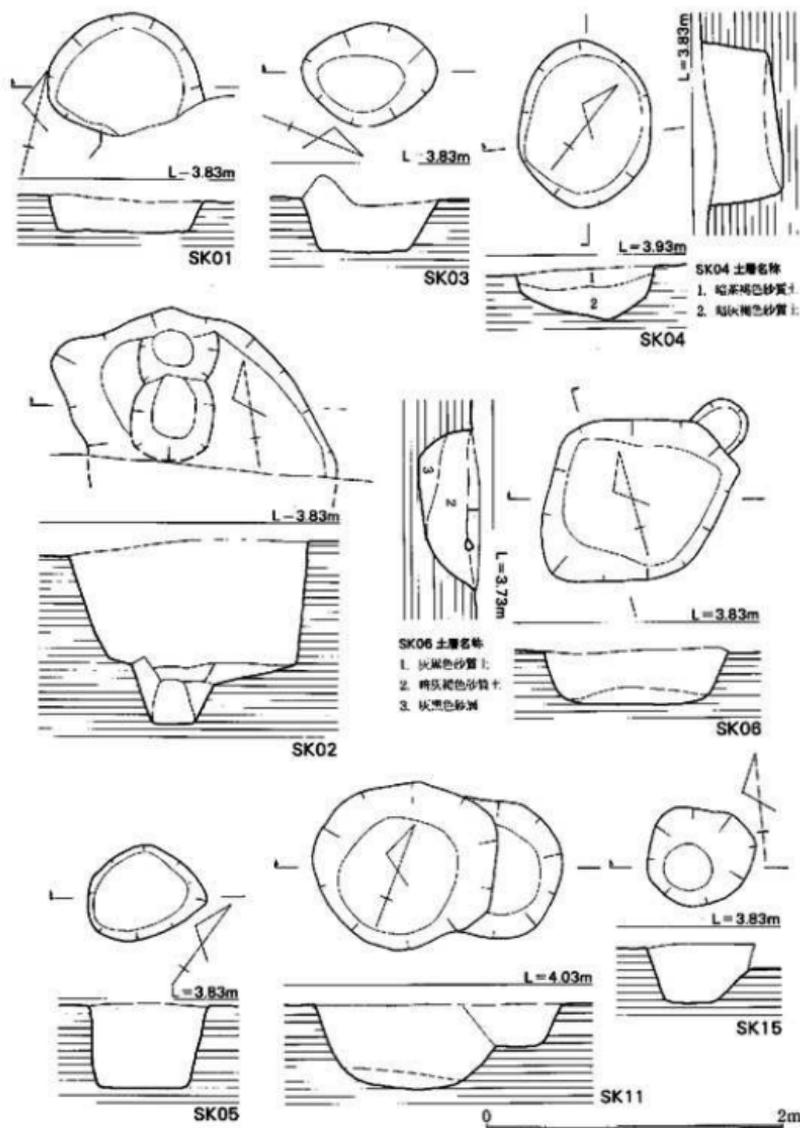
ずかに外反する。高台は外側へ強く張る。内外面ヨコナデ調整で、外底部にヘラ切り痕を残す。色調は暗茶褐色～暗黄灰色を呈する。87は高台径10cmを測る。高台の断面形はコの字形を呈している。内外面はヨコナデ調整である。胎土に砂粒を含んでいるが、成形は須恵器の作りである。褐色を呈する。84は内黒土器の破片で、復原高台径は9.2cmを測る。内外面は磨滅している。88・89は高台の脚部である。88の内面はヨコ方向のヘラケズリを施す。外面はヨコナデ調整である。89の脚部の内外面はヨコナデ調整である。いずれも胎土は土師質であるが、成形は須恵器と同じである。91は高台付の坏で、古墳時代の所産である。高台径5cm、現存高3.7cmを測る。褐色を呈する。壺は破片が多数出土したが、92のみ図示した。復原口径19.6cmを測り、口縁部は強く外反する。内面はタテ方向のヘラケズリを施し、体部外面は粗目のハケを施す。第12図94は石鍋片である。復原の底径は19cmを測る。外面のケズリはタテ長で、規則性がある。内面は丁寧なケズリを施す。外面には煤が付着している。

2) 土坑説明 (第13～22図)

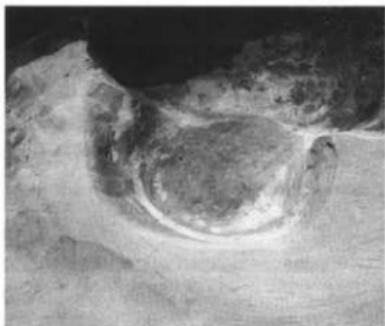
今回検出した遺構は奈良時代から近世に及んでいる。遺物には古墳時代の須恵器等が多数に出土したが、遺構に伴うものはない。ここでは土坑をSK、井戸をSE、覆乱土坑をSXと表示した。

土坑は大型・小型の別があり、形状も様々である。平面形は不整円形・不整隅丸長方形・楕円形、隅丸長方形等がある。これらの土坑の規模、構造については表1・2にまとめているので、参考にされたい。ここでは主な土坑について説明を加えたい。土坑の覆土については先述したように、暗灰褐色砂質土、又は黒褐色砂質土であるが、いずれも黄色土の粘土粒子を含んでいる。

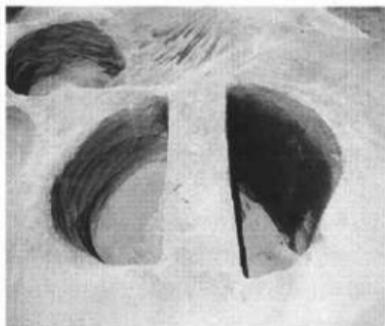
平面形が不整円形を呈する土坑にはSK01・03～05・11・15・18・24・32・36・39B・57A・57B・58がある。長軸の長さが100cm前後を測り、断面形は逆梯形である。SK01から須恵器坏蓋、SK04から須恵器の高台付坏が出土している。同じく平面形が不整円形ではあるが、底面に柱穴を有す土坑に、SK26・34・42がある。SK26は長径120cmを測り、底面に径約64cm、深さ58cmを測るpitを有している。同じくSK34は長径80cmを測り、底面には径50cm、深さ84cmを測るpitがある。SK42のpitは小さく径27cmを測る。いずれの土坑も柱穴掘方の可能性をもっている。SK34・42からは須恵器の高台付坏が出土した。平面形が隅丸長方形を呈する土坑には、SK12・13・41がある。SK12・13は断面形が箱形を呈する。これらの土坑は近世の地下倉庫と考えられ、四隅に柱と側壁に板壁の痕跡を残していた。室としての機能をもつものであろう。伊万里・唐津系の陶磁器が出土した。SK41は2段掘りとなっており、1段目の断面形は逆梯形を呈している。底面に長径92cm、深さ53cmを測る。この土坑からは須恵器の坏、土師器の甗片が出



第138图 上地SK01~06·11·15实测图(图尺1/40)



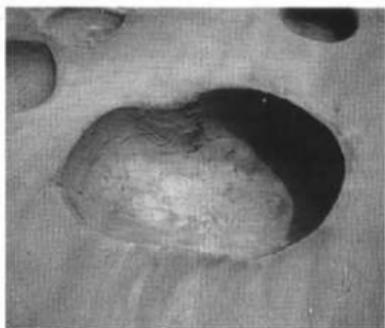
土城SK01 (東から)



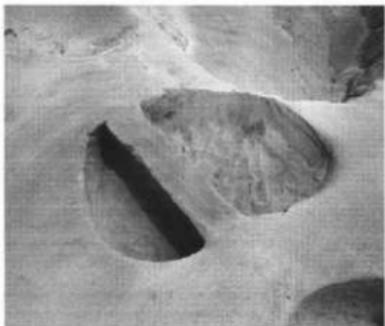
土城SK04 (西から)



土城SK06 (南から)



土城SK11 (北から)



土城SK16 (北から)

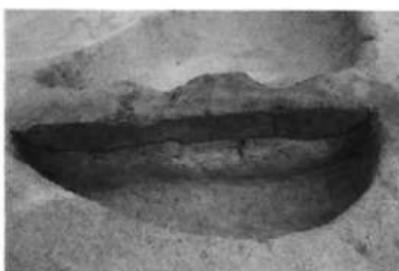


土城SK24・17 (東から)

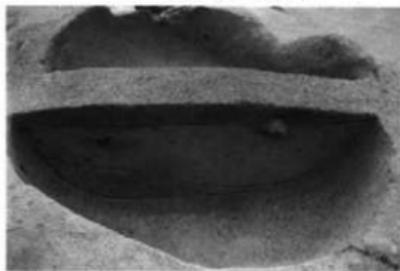
土した。平面形が不整隅丸長方形を呈する土埴には、SK02・06・16・22・28・30・31・33・53・59・62・63・65・66・70Bがある。大型と小型の土埴に分けられる。土埴SK06・16・28・30・31・33・65は小型で、長軸の長さは100cm前後を測る。断面形は逆梯形を呈する。土埴SK59・62・63・66・70Bは大型で、長軸の長さが150~250cmの間にある。いずれも断面形は逆梯形を呈するが、SK70Bの底面は丸味をもっている。SK53の底面には径37cm、深さ33cmを測るpitがある。又、SK62・66は2段掘りの土埴で、SK62の下段の平面形は不整隅丸長方形を呈し、長さ146cm、深さ75cmを測る。断面形は逆梯形である。SK66の下段の平面形は不整円形を呈し、長径160cm、深さ70cmを測る。断面形は逆梯形である。SK02は底面にpitを有している。pitの径は58cm、深さ40cmを測る。遺物はSK06から須恵器坏蓋・坏・皿が、SK22から須恵器坏蓋・坏・甕片が、SK63・65から須恵器坏、SK70Bからは須恵器坏蓋・坏、土師器皿・甕・甗片、土甕が出土した。平面形が隅丸長方形の土埴はSK19・41・64・70A・71B・72で、断面形は逆梯形を呈する。70A・71B・72は切り合いのため全体形は不明である。SK64は整った形状である。遺物はSK19から土師器坏・高台付椀が、SK70Aから須恵器坏蓋・坏、土師器皿・甗片、籾羽口片が出土した。平面形が隅丸方形を呈する土埴には、SK27・47・51・56Aがある。断面形はSK47がレンズ状、他は逆梯形を呈する。SK47の覆土は真黒色砂質土である。遺物は土師器片が出土。SK56Aの底面には径36cm、深さ24cmを測るpitが存在する。遺物はSK27か



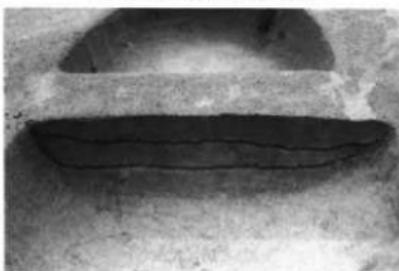
土埴SK04土層状態(南から)



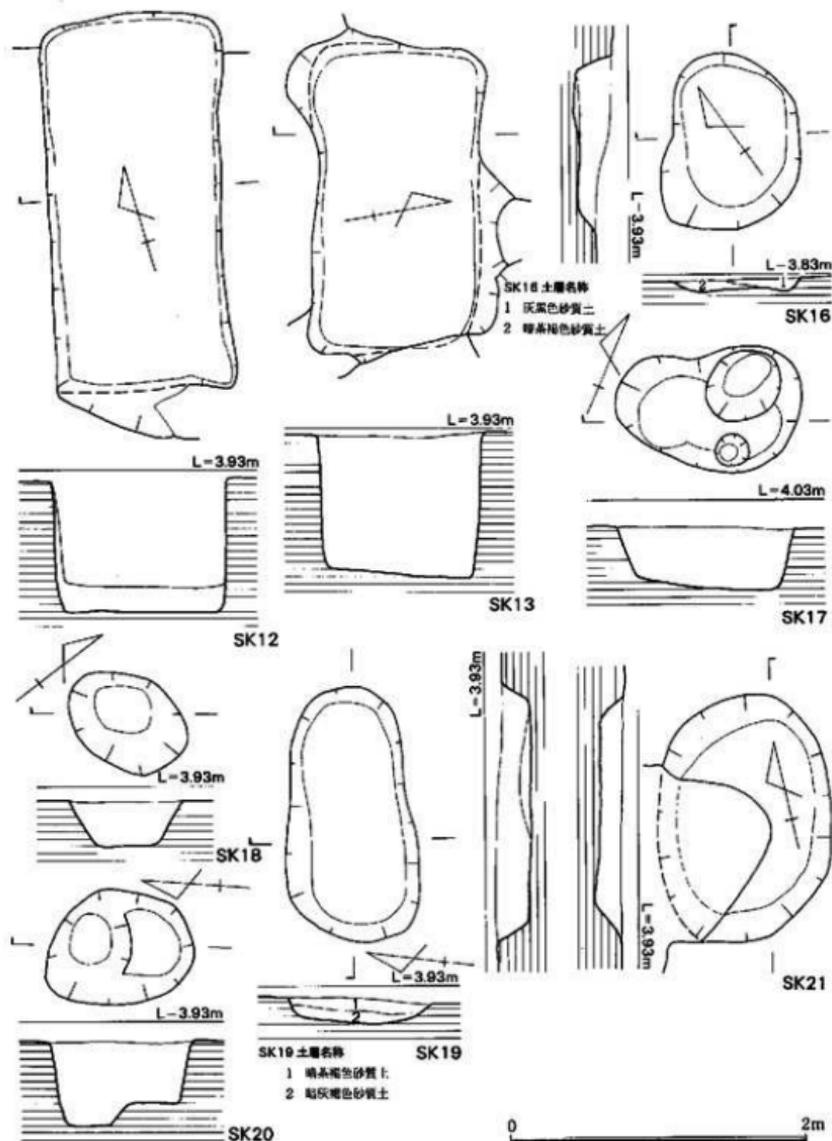
土埴SK16土層状態(北から)



土埴SK06土層状態(東から)



土埴SK19土層状態(西から)



第14圖 土坑SK12・13・16~21実測図(縮尺1/40)



土埴SK22 (南から)



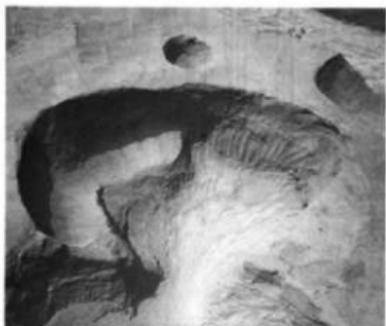
土埴SK26・27 (北から)



土埴SK23 (西から)



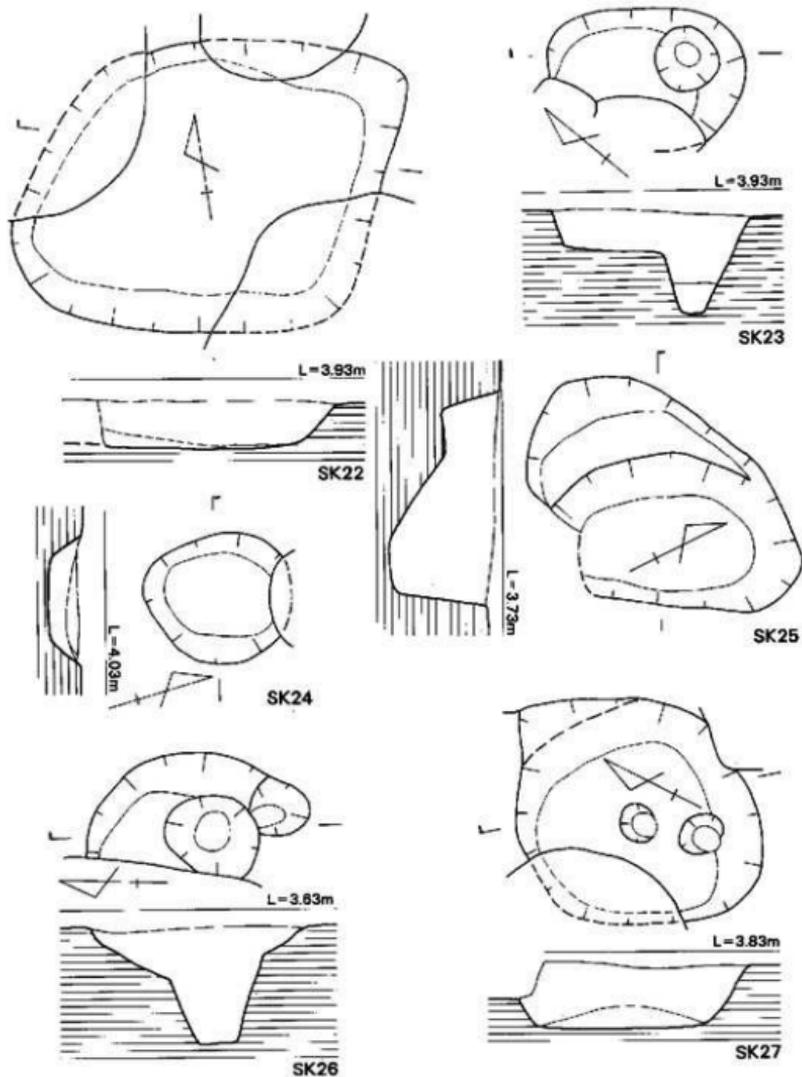
土埴SK33 (西から)



土埴SK25 (南から)

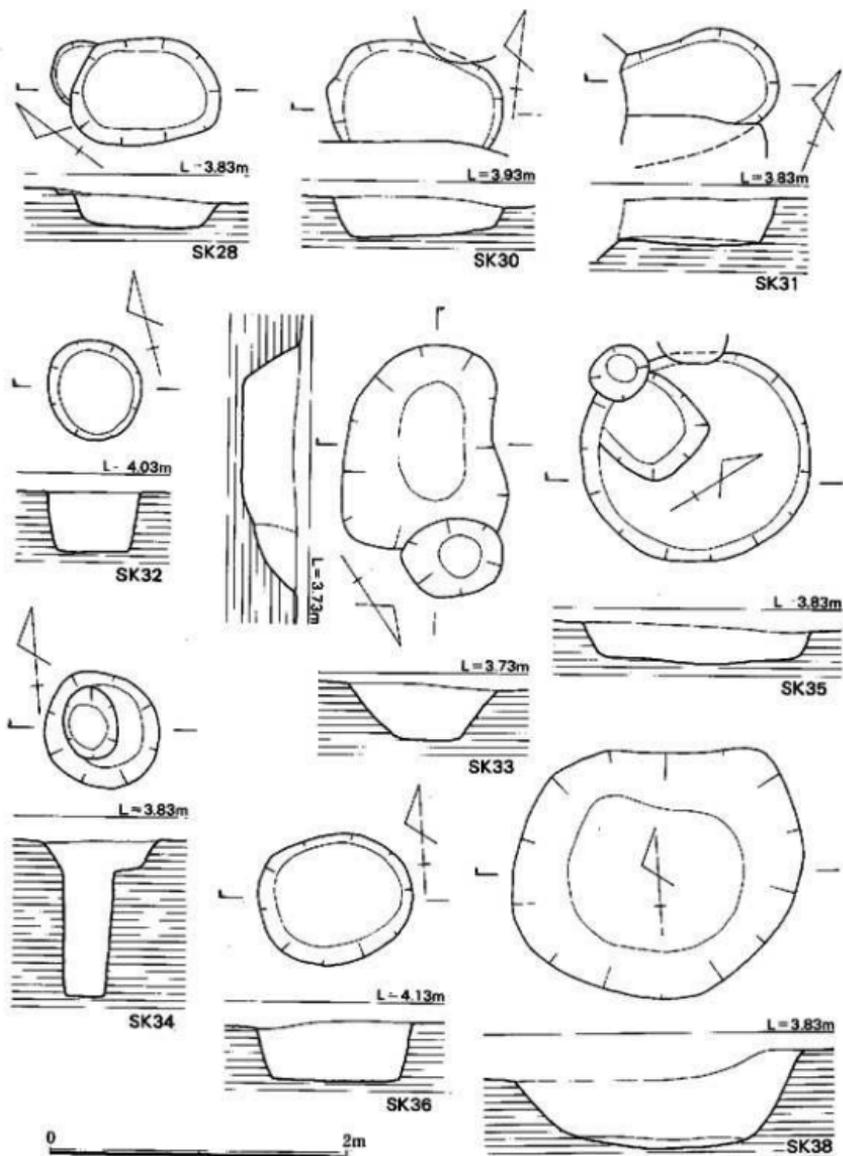


土埴SK35 (南から)

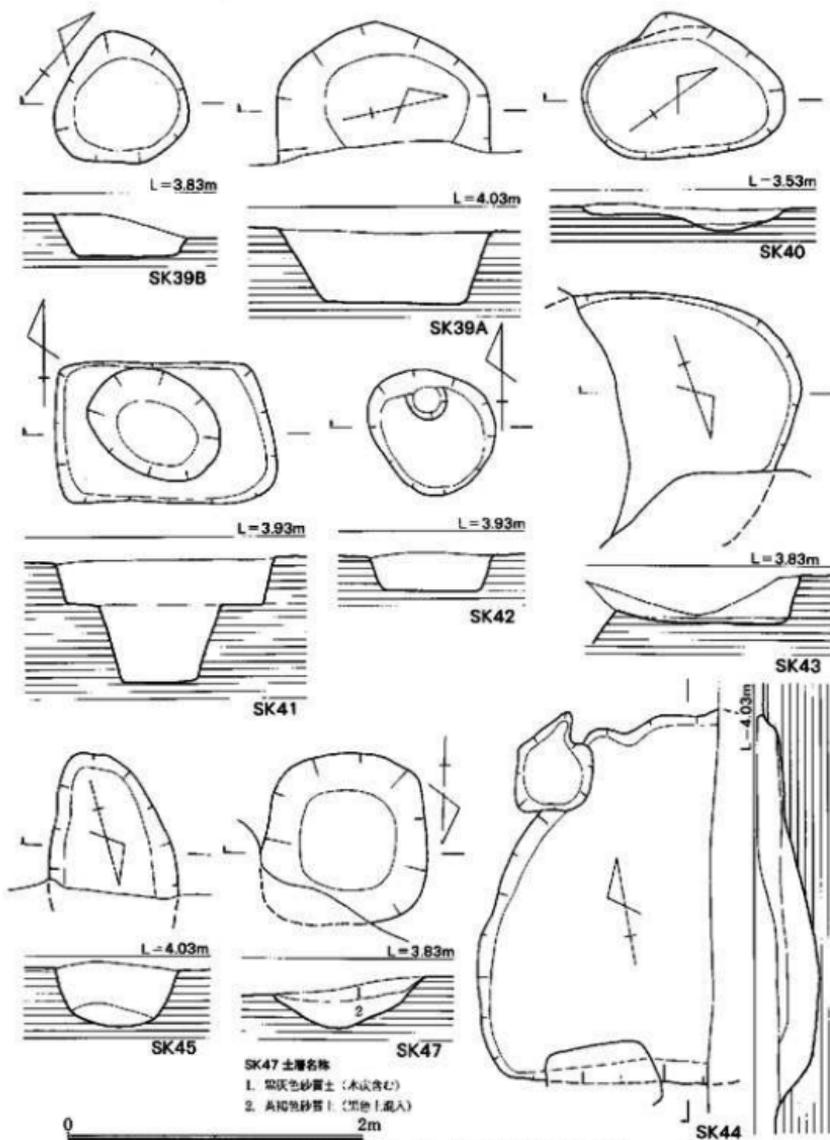


0 2m

第15图 上城SK22~27实测图 (缩尺1/40)



第16圖 土壇SK28・31~36・38実測図(縮尺1/40)



第17図 十塚SK39A・B~45・47実測図(縮尺1/40)



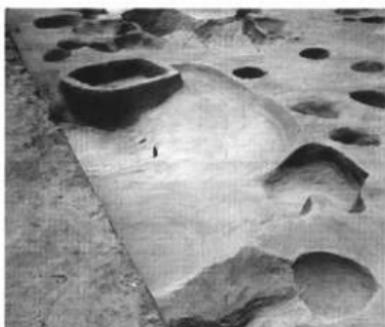
土壇SK38 (南から)



土壇SK41 (東から)



土壇SK39 (北から)



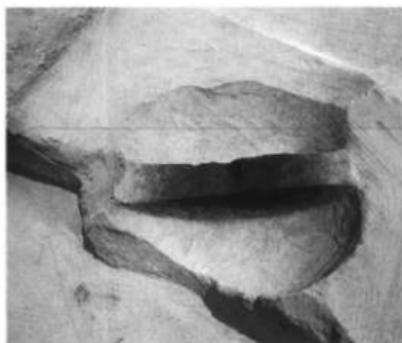
土壇SK44 (東から)



土壇SK40 (南から)



土壇SK45 (西から)



土坑SK47 (西から)

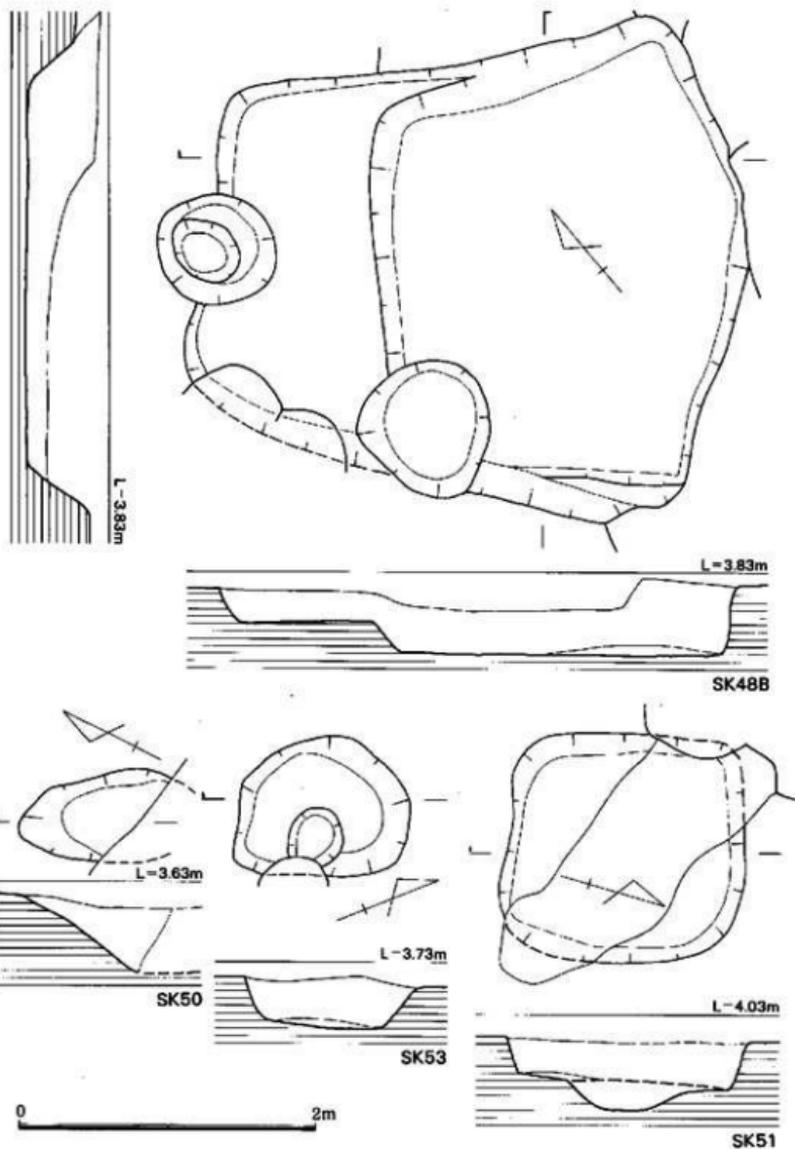


土坑SK49 (東から)

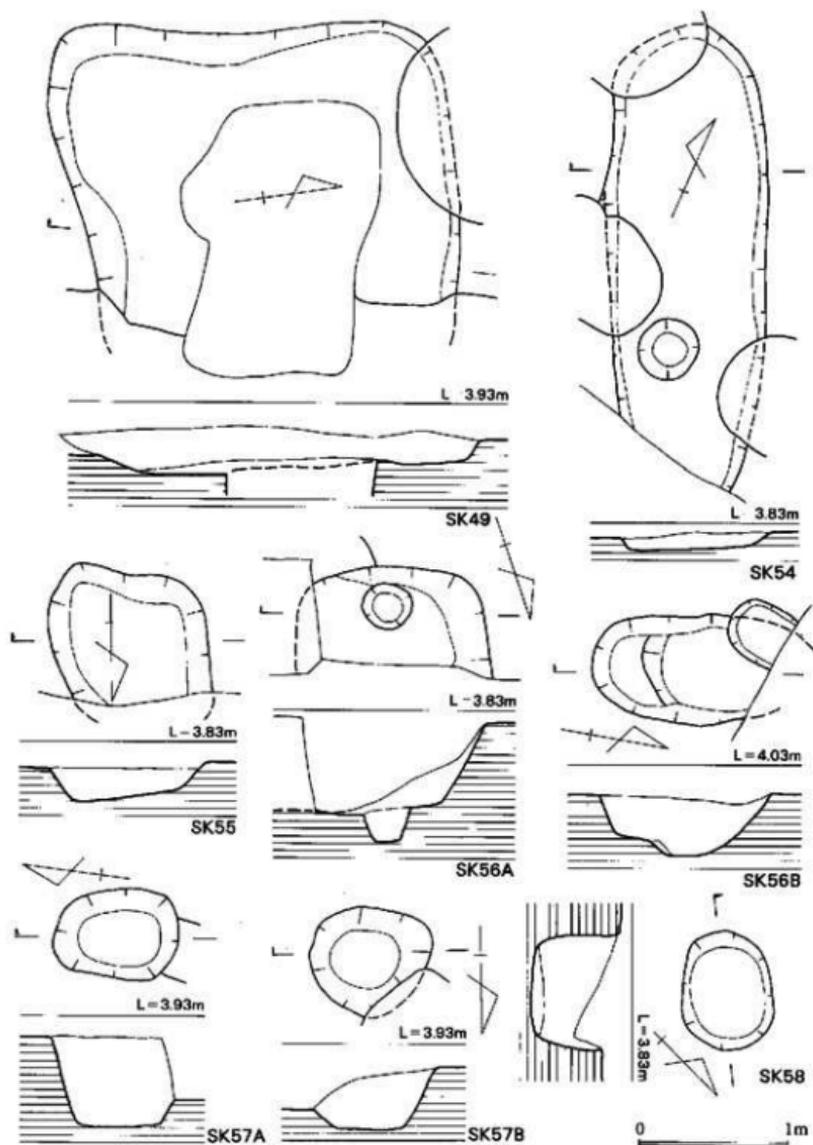


整穴状土坑SK48 (北から)

ら須恵器環・皿が出土した。不整隅丸方形を呈する土坑はSK38・55・67・71Aがある。断面形はSK38が半円状、55・71Aが逆梯形を呈する。SK71Aの底面には長さ140cm、幅90cm、深さ24cmを測る土坑が存在する。SK55からは須恵器環片が出土した。平面形が不整楕円形の土坑にはSK17・20・21・23・39A・40・45・50・54・56B・69がある。断面形はSK20・45・50・56Bを除いて逆梯形を呈する。SK20・56Bの底面は2段になっている。SK45は底面が丸味をもっている。SK20からは須恵器環、土師器碗が、SK50は須恵器環、SK54は須恵器環蓋、SK69は須恵器皿が出土した。平面形が円形を呈する土坑SK25は、径155cmを測り、底面の隅に長さ



第18圖 土坑SK48・51・53実測図(縮尺1/40)



第19圖 土城SK49・54～58実測図(縮尺1/40)



土壇SK53 (北から)



土壇SK56B (東から)



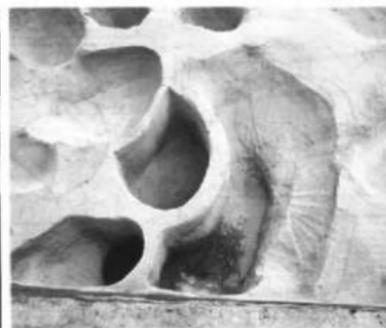
土壇SK54 (東から)



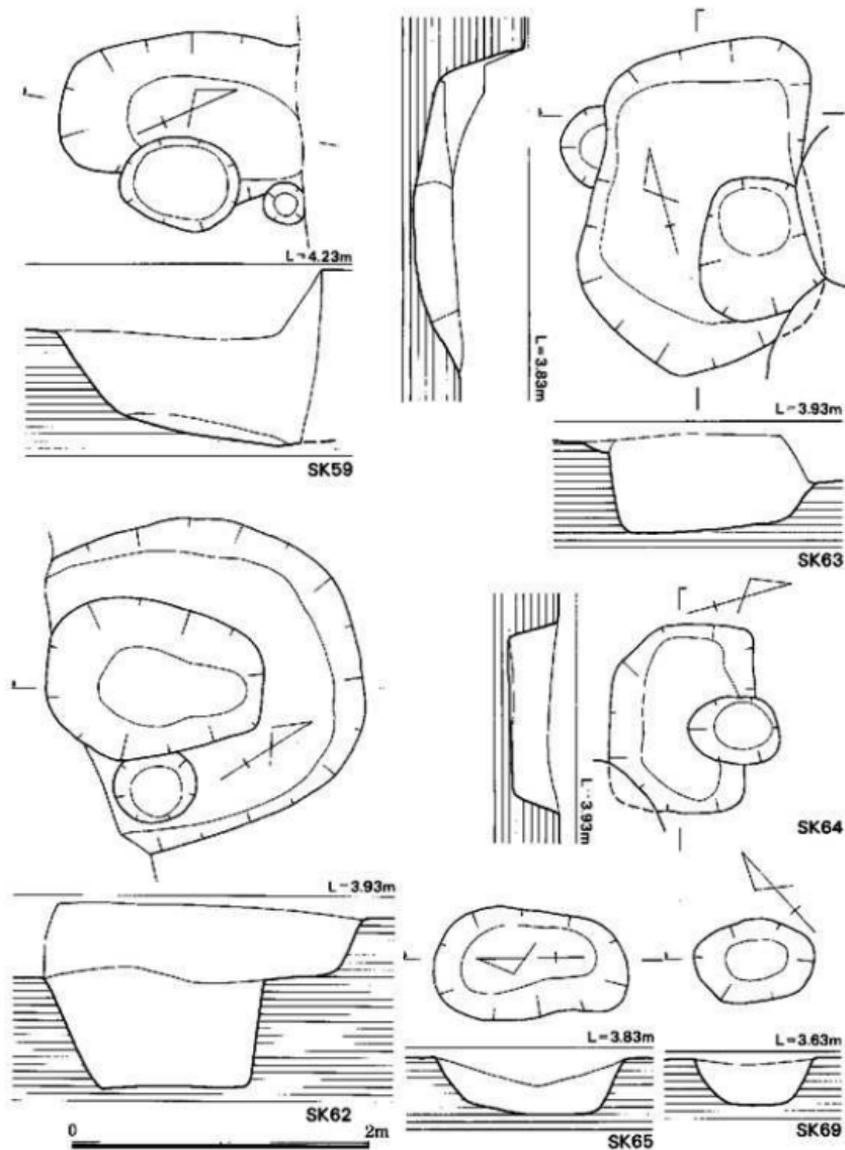
土壇SK56A (北から)



土壇SK57 (北から)



土壇SK59 (北から)



第20図 土城SK59・62・63・65・69実測図(縮尺1/40)



土埴SK62 (南西から)



土埴SK68 (北から)



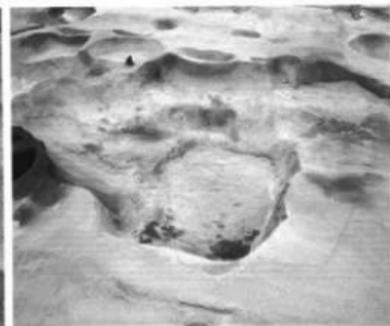
土埴SK66 (西から)



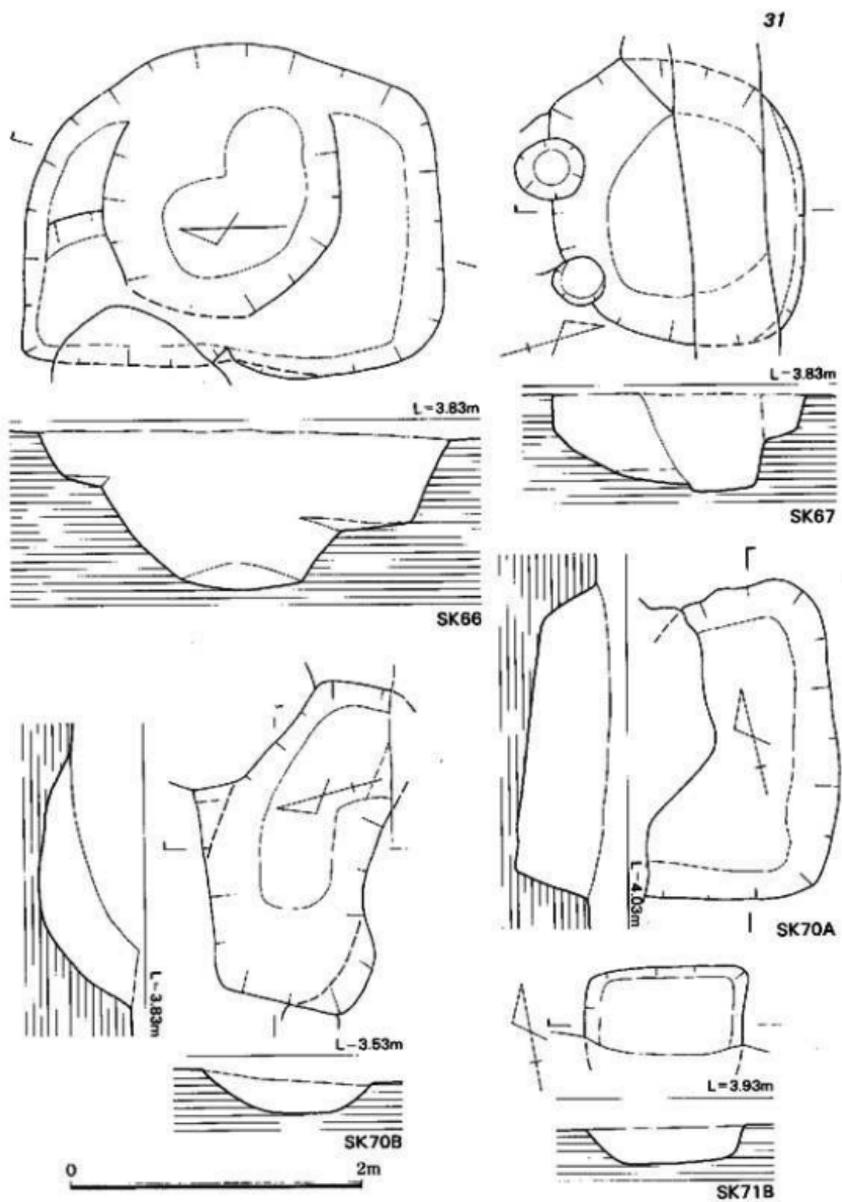
土埴SK70A (東から)



土埴SK67 (北から)



土埴SK70A・71Aの完備状態 (東から)



第21圖 土壇SK66・67・70B・71B実測図(縮尺1/40)



土壇SK70B (南から)



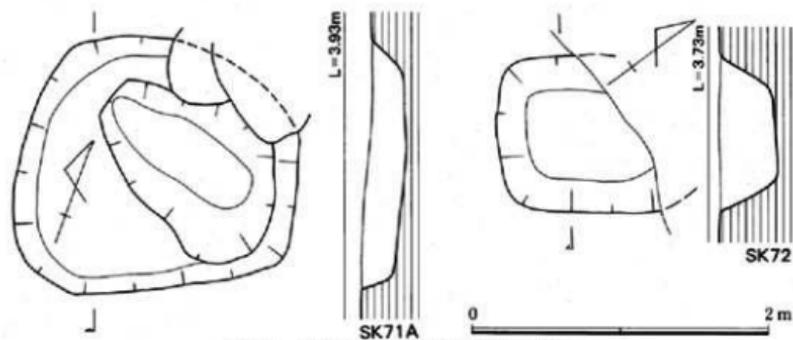
土壇SK71B (南から)



土壇SK71A (南から)



土壇SK72 (南から)



第22図 土壇SK71A・72 実測図 (縮尺1/40)

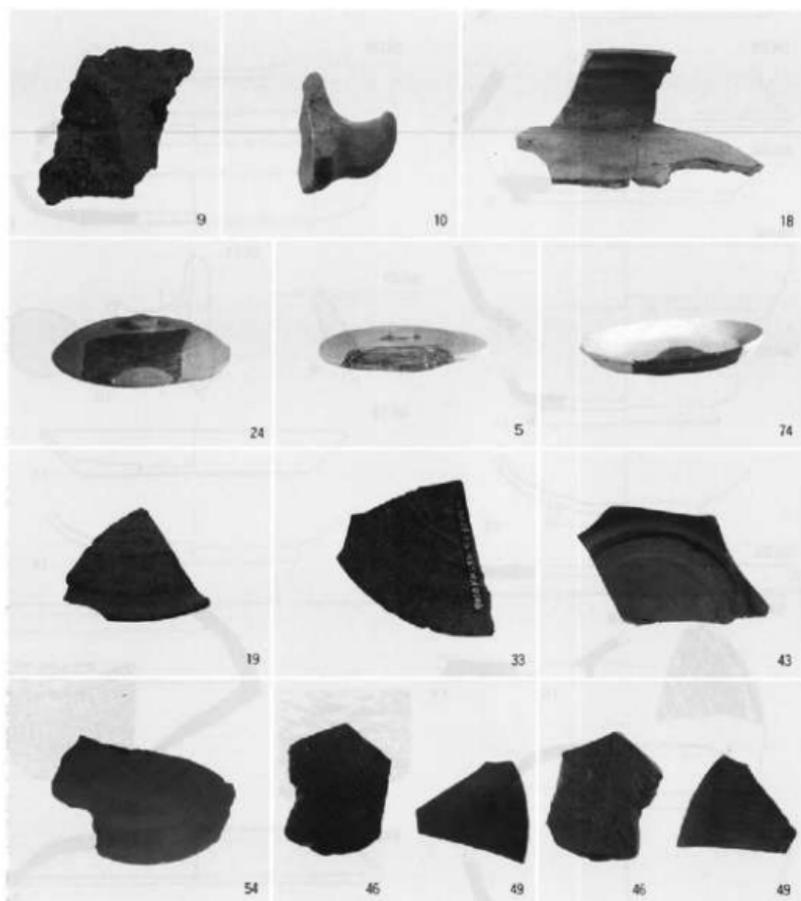
65cm、深さ19cmを測る pit がある。この土域からは須恵器の坏蓋・高台付坏、布目痕のある平瓦が出土している。平面形が不整形を呈する土域にはSK25・43・44がある。SK25の底面は2段になっている。SK43は断面形が逆梯形を呈する。SK44は浅い椗鉢状の底面で、規模の大きな土域である。覆土より須恵器の坏蓋・坏・甕、土師器甕・甗等が多量に出土した。竪穴状土域にはSK48・49がある。竪穴状としたのは平面形が隅丸方形又は、不整隅丸長方形を呈し、大型の土域であるためである。SK48の平面形は不整隅丸長方形で、長さ355cm、幅は最大で330cm、最小で220cm、深さは46cmを測る。底面が2段になっており、西側がベット状を呈する。下段は

第1表 土域一覧表①

遺構名	形 態		規 模 (cm)			出 土 遺 物	時 代	備 考
	平面形	断面形	長さ	幅	深			
SK01	不整円形	逆梯形	100	90	22	須恵器(蓋)、土師器(甕・甗)		
02	不整隅丸長方形	逆梯形	180	110 ^{14c}	134	須恵器(蓋・高坏筒・甕)、土師器(甕)		境界地にある
03	不整円形	逆梯形	95	70	35	須恵器(甕)、土師器土器(甕)		
04	不整円形	逆梯形	110	90	46	須恵器(坏)、土師器(甕)		
05	不整円形	逆梯形	72	65	87	須恵器(甕)、土師器(甕)		
06	不整隅丸長方形	逆梯形	130	110	38	須恵器(坏・蓋・甕)、土師器(坏・甕)		SK09と初り合う
07	不 整 形	逆梯形	221 ^{14a}	70 ^{14a}	25	須恵器(蓋・甕)、土師器(甕) 増巻		
08	隅丸長方形	逆梯形	248	200 ^{14a}	73	須恵器(甕)、土師器(坏・甕)		SK07 *
09	円 形	逆梯形	125	125	42	須恵器(高坏筒)、土師器(甕・甗?)		井戸
10	円 形	逆梯形	90	81	46	須恵器(坏)、土師器(坏)		
11	不整円形	逆梯形	125	113	42	須恵器(甕・甗)、土師器(甕・甗の把手)		
12	隅丸長方形	箱 形	265	115	67	須恵器(坏・甕)、土師器土器(甕・灯明瓦、伊万里系、赤漆)		近世
13	隅丸長方形	箱 形	210	110	90	須恵器(蓋・甕)、土師器(坏・甕)		近世
14	隅丸長方形	逆梯形	108	90	32	須恵器(甕)、土師器(坏)		
15	不整円形	逆梯形	70	65	36	須恵器(甕)、土師器土器(高坏)		
16	不整隅丸長方形	逆梯形	130	90	27	須恵器(蓋・甕)、土師器土器(高坏)		
17	不整円形	逆梯形	130	90	46	土師器土器(甕)		
18	不整円形	逆梯形	80	68	30	須恵器(坏・甕)、土師器(坏)		
19	隅丸長方形	逆梯形	170	90	18	土師器(坏・甕・甗・鉢)		
20	不整角円形	二段屋形	100	75	57	須恵器(坏・蓋・甕)、土師器(甕)、土師器土器(甕把手)		
21	不整角円形	逆梯形	170	110	16	須恵器(甕)、土師器(坏)		
22-22R	不整隅丸長方形	逆梯形	255 ^{14a}	155 ^{14a}	36	須恵器(坏・蓋・甕)、土師器(坏・甕)、土師器土器(甕把手)		SK25とほぼ同位置不明 遺構はSK25も参照
23	不整角円形	逆梯形	130	90 ^{14a}	23	須恵器(蓋・甕)、土師器(坏・甕)		
24	不整円形	逆梯形	95	90	20	須恵器(甕)、土師器(坏・甕)		
25	不 整 形	二段屋形	200	140	65	須恵器(坏・甕)、土師器(坏・蓋・甕・高坏)、平瓦		SK25と同一
26	不整円形	レズ状	120 ^{14a}	80 ^{14a}	23	須恵器(甕)、土師器土器(甕)		履板に切られる
27	隅丸長方形	逆梯形	180	140 ^{14a}	40	須恵器(坏・甕・甗)		SK26に切られる
28	不整隅丸長方形	逆梯形	100	70	16	須恵器(坏)、土師器(坏)		
29	不 整 形	逆梯形	100 ^{14a}	40 ^{14a}	17	土師器(坏)		SK06に切られる
30	不整隅丸長方形	逆梯形	115	70 ^{14a}	30	須恵器(甕・甗)、土師器(甕・甗)		SK63に切られる
31	不整隅丸長方形	逆梯形	100 ^{14a}	60 ^{14a}	30	須恵器(甕)、土師器(坏・鉢・甕)		SK08に切られる
32	不整円形	逆梯形	70	60	41	土師器(坏)		
33	不整隅丸長方形	逆梯形	140	110	39	須恵器(坏)		

第1表 土坑一覧表②

遺構名	形態		規模 (m)			出土遺物	時代	備考
	平面形	断面形	長さ	幅	深			
SK34	不整円形	逆錐形	80	80	22	須恵器(環)、土師器(環)		
35	円形	逆錐形	155	150	29	須恵器(甕・環)、土師器(環・鉢・高環器)、平瓦		
36	不整円形	逆錐形	110	90	40	須恵器(甕)、土師器(環・甕・鉢)、平瓦、瓦葺、鉄押		
37	—	—	—	—	—	須恵器(甕)、土師器(環)、内服土器(環)		平面図表面不可
38	不整圓九方形	半円伏	200	170	96	須恵器(甕・甕)、土師器(環・甕)		
39A	不整圓形	逆錐形	148	160 ¹⁴⁰	42	須恵器(甕)、土師器(環)		遺物の区別なし
39B	不整円形	逆錐形	98	90	28			
40	不整圓形	レンズ状	148	100	15	須恵器(甕)、土師器(環・甕)、土師質土器(甕)		
41	圓九長方形	逆錐形	158	100	34	須恵器(環・甕・甕)、土師質土器(甕・鉢・甕)		
42	不整円形	逆錐形	90	80	25	須恵器(環)、土師器(甕)		
43	不整形	逆錐形	160 ¹¹⁶	120 ¹¹⁶	34	須恵器(甕・甕)、土師質土器(甕)		S X 68 に切られる
44	不整形	層状	520	310 ¹¹⁶	88	須恵器(環・甕・甕・高環)、土師器(環・甕・鉢)、土師質土器(甕・甕・高環)、瓦、青磁、鉄押、土師		埋戻地にある
45	不整圓形	半円逆錐形	90 ¹¹⁶	80	44	須恵器(甕・甕) 白磁		
46	不整形	逆錐形	80	50 ¹¹⁶	32	須恵器(環・甕)、土師器(環)、土師質土器(甕)		
47	圓九長方形	レンズ状	110	110	36	土師器片		
48	不整圓長方形	二段層り	355	330	45	須恵器(環・甕・甕)、土師器(環・甕・鉢)、内服土器(甕)、土師、鉄押、平瓦		
49	圓九長方形	逆錐形	200	200	25	須恵器(環・甕・甕)、土師器(環・甕・鉢)、鉄押、墓石		近世
50	不整圓形	—	90 ¹¹⁶	55	37	須恵器(環)、土師器片		
51	圓九長方形	逆錐形	160	155	31	須恵器(環・甕・高環器)、土師器(甕・甕)		
52	不整形	—	170 ¹¹⁶	70 ¹¹⁶	30	須恵器(甕・甕)、土師器(甕)		埋戻に切られる
53	不整圓長方形	逆錐形	120	106	31	須恵器(甕・甕)、土師器(環・甕)		
54	不整圓形	逆錐形	300 ¹¹⁶	118	7	須恵器(甕・甕)、土師器(環)		埋戻に切られる
55	不整圓九方形	逆錐形	118	90 ¹¹⁶	20	須恵器(環)、土師質土器(甕)		埋戻に切られる
56A	圓九長方形	逆錐形	110 ¹¹⁶	80 ¹¹⁶	50	須恵器(環・甕・高環器)、土師器(環・甕)、白磁片		S X 72 に切られ、埋戻地にある
56B	不整圓形	二段層り	130 ¹¹⁶	70	42	須恵器(環・甕)		P 38 に切られる
57A	不整円形	逆錐形	85	60	38	須恵器(環・甕)、土師器(甕)		
57B	不整円形	逆錐形	80	75	41	須恵器(甕・甕・甕)、土師器(環・甕・甕)		
58	不整円形	逆錐形	80	60	57	須恵器(環・甕・甕)、土師質土器(甕)		
59	不整圓長方形	逆錐形	160 ¹¹⁶	100 ¹¹⁶	56	須恵器(環・甕・甕)、土師器(環・甕)		S K 58 に切られる
60	不整形	逆錐形	130 ¹¹⁶	70 ¹¹⁶	54	須恵器(環・甕・甕)、土師器(鉢)		S X 75 に切られる
61	円形	逆錐形	90	80	58	須恵器(甕)、土師器(甕)		S X 42 と同一
62	不整圓長方形	逆錐形	200 ¹¹⁶	220	40	須恵器(環・甕・甕)、土師器(環・甕)		
63	不整圓長方形	逆錐形	220	140	62	須恵器(環・甕・甕)、土師器(環・甕)、鉄押、土師		
64	圓九長方形	逆錐形	130	100	36	須恵器(環・甕)、土師器(環)		
65	不整圓長方形	逆錐形	130	70	38	須恵器(環・甕・甕)、土師器(環・甕)		
66	不整圓長方形	逆錐形	200	220	106	須恵器(環・甕・甕)、土師器(環)		
67	不整圓九方形	逆錐形	220	170 ¹¹⁶	64	須恵器(環・甕)、土師器(環・甕)		S K 34 ・ 本遺構に切られる
68	圓九長方形	レンズ状	150	130	57	須恵器(甕・甕)、土師器(環・甕・高環器)		S X 44 と同一
69	不整圓形	逆錐形	80	60	31	須恵器(甕)、土師器(環)、土師質土器(甕・甕・高環器)		
70A	圓九長方形	逆錐形	210	120 ¹¹⁶	49	須恵器(環・甕・甕)、土師器(環・甕) 土師質土器(甕・甕・高環器)、青磁、鉄押、土師		
70B	不整圓長方形	逆錐形	225	115 ¹¹⁶	61	須恵器(環・甕・甕)、土師器(環・甕・高環器)、土師質土器(甕・甕・高環器)、陶器片		
71A	不整圓九方形	逆錐形	190	170	22			
71B	圓九長方形	逆錐形	195	60 ¹¹⁶	25	須恵器(環・甕・甕・高環器)、土師器(環・甕・高環器)		遺物の区別なし
72	圓九長方形	逆錐形	118 ¹¹⁶	100	34	なし		

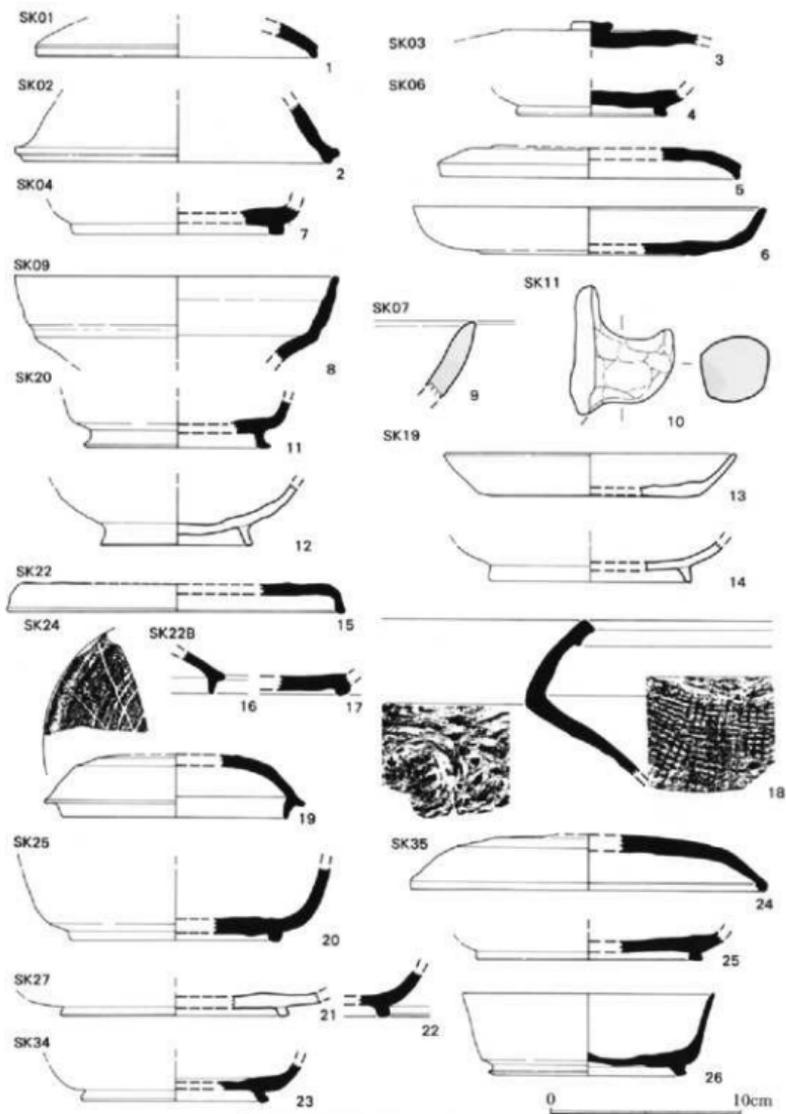


土坑出土遺物 ※番号は実測器番号と一致する

長さ250cm、幅320cmを測る。テラス状の段は高さ24cm、幅135cmを測る。覆土からは須恵器環・環蓋・甕片・軒平瓦片が出土した。SK49は他の土坑に切られ、全体形は不明であるが、平面形は隅丸長方形を呈するものと考えられる。断面形は逆梯形を呈する。現存長260cm、深さ25cmを測る。覆土から須恵器の高台付環が出土している。

3) 土坑出土遺物 (第23~28区)

土坑からは奈良~江戸時代の遺物が出土したが、ここでは奈良~平安時代の土坑から出土し



第23図 土城出土遺物実測図① (縮尺 1/3)

た遺物について報告する。又、実測可能なものについては出来る限り図化した。ここには器形や大きさが判断できるものについて載せている。

- SK01出土遺物 (1) 須恵器の坏蓋で、復原口径15cmを測る。口縁端部をつまみ出している。
- SK02出土遺物 (2) 須恵器の高坏の脚片である。底径16cmを測る。端部を外方へつまみ出す。
- SK03出土遺物 (3) 須恵器の蓋で、つまみは直径2.2cmを測り、擬宝珠形である。
- SK04出土遺物 (7) 須恵器坏で、復原高台径10.5cmを測る。高台は低く、底部の内側に付く。
- SK06出土遺物 (4~6) いずれも須恵器で、4は高台付坏で、高台径7.5cmを測る。5は坏蓋で、端部下位をつまみ出している。復原口径15.8cmを測る。6は皿で、口径18.5cm、器高2.5cmを測る。体部は丸味をもっている。
- SK07出土遺物 (9) 埴輪の破片である。厚さ2.2cmを測る。外面はガラス質化している。
- SK09出土遺物 (8) 須恵器の坏か、高坏の脚の可能性もある。体部は丸味をもっている。復原口径17cmを測る。体部に深い水引き痕が残る。
- SK11出土遺物 (10) 土師器甕の把手である。最大径3.5cmを測る。指ナゲ調整を施す。
- SK19出土遺物 (13・14) いずれも土師器で、13の坏は口径15cmを測る。底部はへら切りである。体部内外面はヨコナゲ調整である。14の椀は高台径10cmを測る。高台は外側へ張る。
- SK20出土遺物 (11・12) 11は須恵器の坏で、高台は高く、端部は外側へ強くつまみ出す。復原高台径9cmを測る。12は土師器の椀で、高台は高く、復原高台径8cmを測る。
- SK22出土遺物 (15~18) いずれも須恵器である。16・18は古墳時代の所産で、16は坏蓋である。18は壺で、口縁端部外面を肥厚させており、外面に格子目叩き痕、内面に青海波の当て具痕が残る。15は蓋で、復原口径17.6cmを測る。口縁部を折り曲げ、端部をつまみ出している。17は高台付坏で、高台は低い。15・17は奈良時代の所産である。
- SK24出土遺物 (19) 古墳時代の坏蓋で、復原口径11.8cmを測る。天井部外面はへらケズリを行い、へら記号を施している。
- SK25出土遺物 (20・28) 28の平瓦片が出土している。20は須恵器の高台付坏である。高台復原径は11cmを測る。高台は底部の内側に付く。断面形はコの字形を呈する。28の平瓦の凹面は布目痕があり、凸面には格子目叩き痕がある。
- SK27出土遺物 (21・22) 22は須恵器で、高台付の坏である。21は皿で、復原高台径11.6cmを測る。赤焼け土器で、胎土・成形は須恵器の作りと同じである。
- SK34出土遺物 (23) 須恵器の高台付坏である。復原高台径9.4cmを測る。高台は底部の内側に付き、外側へ強く張る。
- SK35出土遺物 (24~27) 24~26は須恵器である。24は蓋で、口径18.7cm、器高3cmを測る。口縁端部は肥厚し、丸味をもっている。25・26は高台付の坏で、26は口径13cm、器高4.3cmを測る。25・26の高台は低い。27は平瓦の破片である。凸面は縄目叩き痕、凹面は糸切り痕が残る。縁辺はへら削り調整である。凸面に離れ砂が付着している。焼成は良好である。色調は黒灰色を呈する。

SK41出土遺物 (30) 須恵器の高台付坏で、復原高台径は4.3cmを測る。高台は低い。32は甌の把手で、扁平な形状を呈する。土師器である。

SK42出土遺物 (32) 須恵器の高台付坏の破片である。高台は低い。

SK44出土遺物 (33~49・53) 37は須恵器の耳付き壺である。把手部分で、厚さ1.2cmを測り、器壁は薄い。正面形は三角形を呈している。貼付部分にハケ調整がみられる。49・53は土師器で、他は須恵器である。33~40は坏蓋である。33は口縁部の内側にかえしを有している。35・38~40は口縁端部を内側へ屈折させる。36は端部を肥厚させる。33の口径は9cm、35~41の復原口径は14~15.4cmを測る。41~45は高台付坏で、高台は底部の内側についている。43の底部外面にヘラ記号がある。46~48は甕の破片で、外面は46が格子目叩き、47が平行叩き、48が条痕状叩きを内面は46・47が同心円状、48がナマコ状の当て具痕を残す。49の復元口径は21.4cmを測る。胴部内面はヘラ削りである。外面は粗目のタテハケを施す。53は甌の把手である。

SK48A出土遺物 (50~52) いずれも須恵器の高台付坏で、50の復原底径は10.8cmを測る。

SK48B出土遺物 (29・54~56) 54は赤焼け土器で、天井部外面にヘラ記号がある。口径10.8cmを測る。55は高台付坏で、高台径10.2cmを測る。56は甕の破片で、外面に格子目叩き、内面は平行或いは青海波の当て具痕が残る。29は軒平瓦の瓦当部片である。均正唐草文の一部が遺存している。灰青色を呈する。

SK49出土遺物 (57・58) いずれも須恵器の高台付坏である。高台径は10~10.5cmを測る。

SK50出土遺物 (59) 須恵器の高台付坏で、高台は高い。復原高台径は9.5cmを測る。

SK54出土遺物 (60) 古墳時代の須恵器坏蓋で、復原口径は10cmを測る。

SK55出土遺物 (61) 須恵器の高台付坏で、高台は小さく、低い。復原高台径9.4cmを測る。

SK57出土遺物 (62) 高台付坏で、赤焼け土器である。高台径は10cmを測る。高台は高い。

SK62出土遺物 (63) 高台付坏の破片で、高台は外側へ張っている。

SK63出土遺物 (64~67) いずれも須恵器の高台付坏で、高台は66を除いて低い。64~66の復原高台径は8.6~10.8cmを、67の復原高台径は12.4cmを測る。

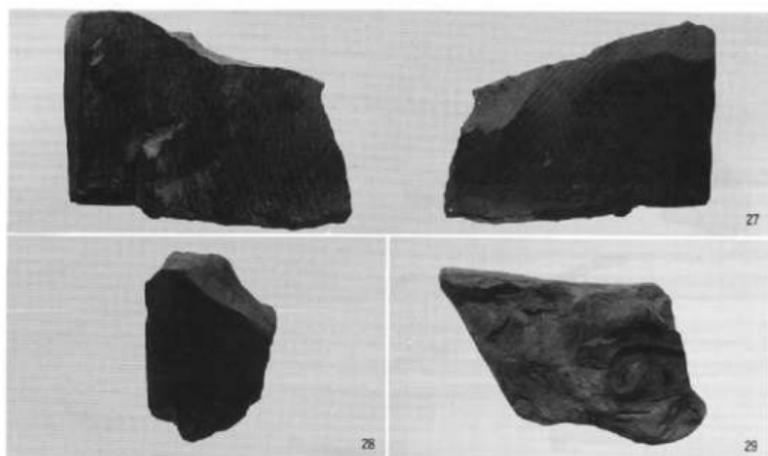
SK65出土遺物 (68~71) いずれも須恵器の高台付坏である。68~70の高台は底部と体部の境にある。68・69の復原高台径は7.6~8.6cm、70・71の復原高台径は9.7~11.3cmを測る。

SK66出土遺物 (72) 須恵器の高台付坏である。復原高台径は8cmを測る。

SK67出土遺物 (73) 須恵器の高台付坏である。復原高台径は8cmを測る。高台は底部の内側につく。

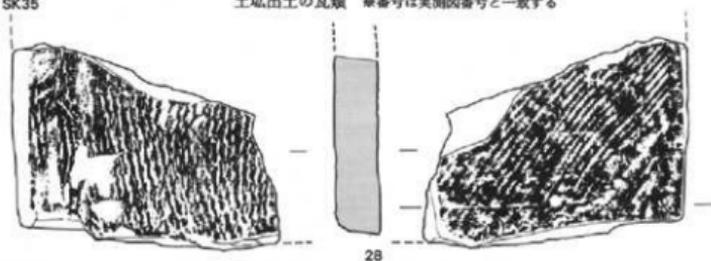
SK69出土遺物 (74・75) 74は須恵器の皿で、口径19.5cm、器高2.7cmを測る。底部は丸味をもち、口縁端部は外反する。75は移動式カマドの破片で、炊き口の罫が残っている。罫の断面形は細長い三角形を呈している。外面はナア調整である。内面はヨコナア調整である。

SK70A出土遺物 (76~83) 76~79は須恵器で、76は高台付坏、77~79は坏蓋である。76の高台径は10cm、77の口径は14cm、78・79の口径は20cm・20.6cmを測る。蓋の口縁端部はいずれも内側へ屈折させる。80・81は甌の把手である。82は土師器の皿で、糸切り底である。口径8cm、

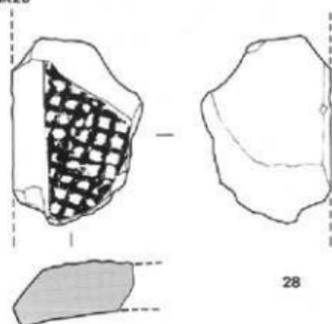


SK35

土坑出土の瓦類 ※番号は実測図番号と一致する



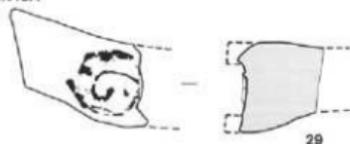
SK25



28



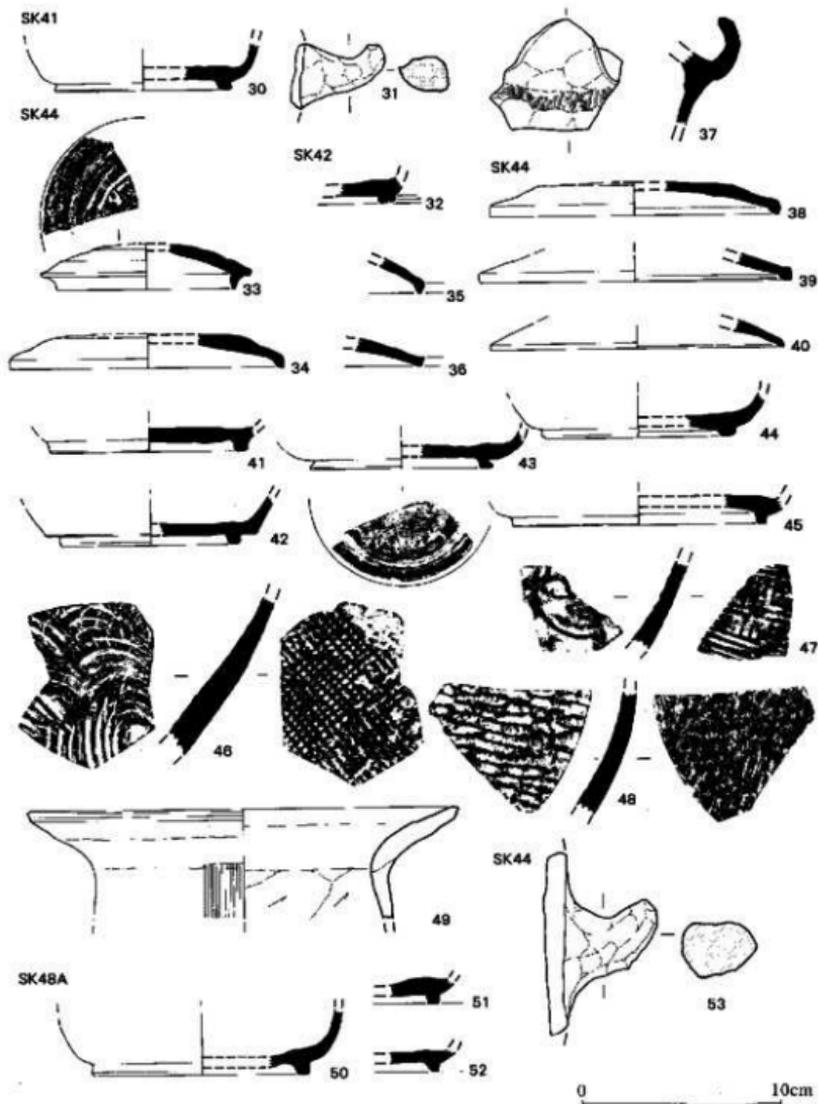
SK48A



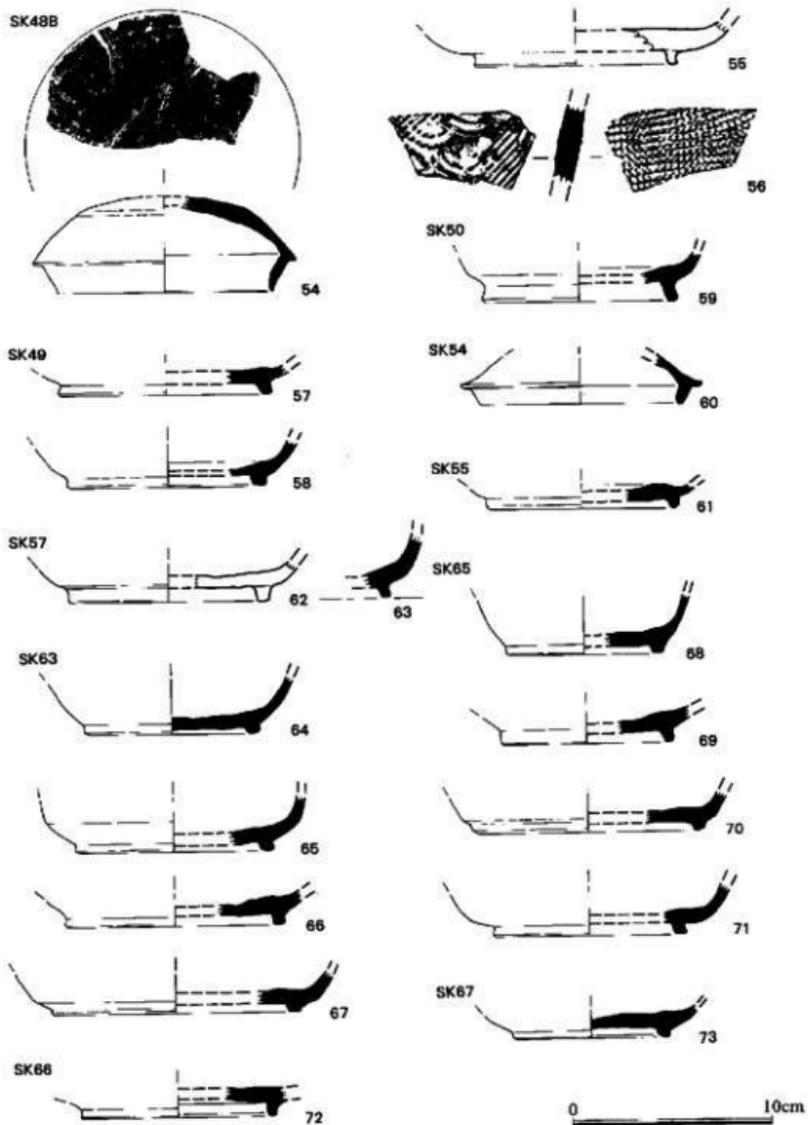
29

0 10cm

第24図 土坑出土瓦類実測図(縮尺1/3)



第25图 上城出土文物实图② (缩尺1/3)



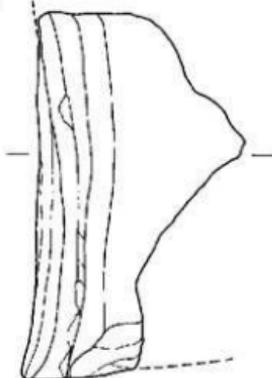
第26图 土城出土遺物実測図③(縮尺1/3)

SK69

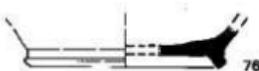


74

SK69



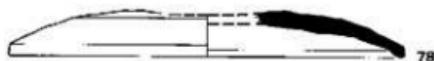
SK70A



76



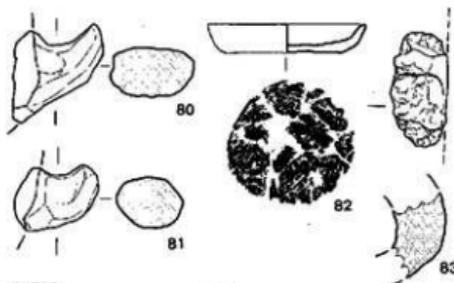
77



78



79



80

82

81

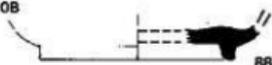
83

SK70B



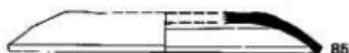
84

SK70B



87

88



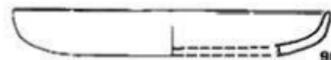
85



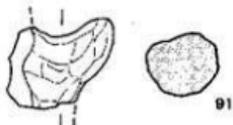
89



86



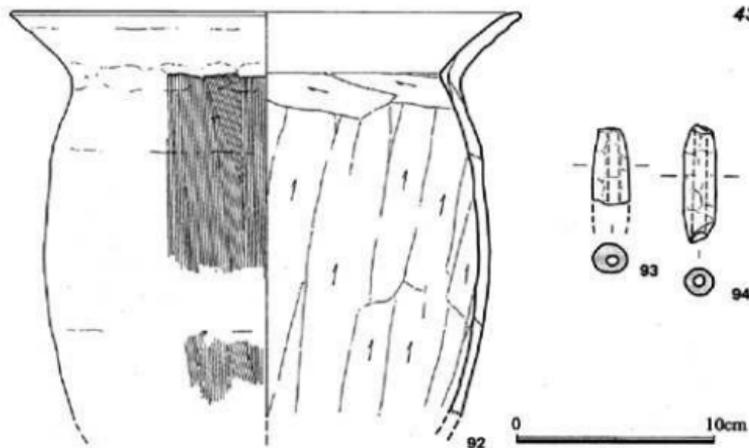
90



91

0 10cm

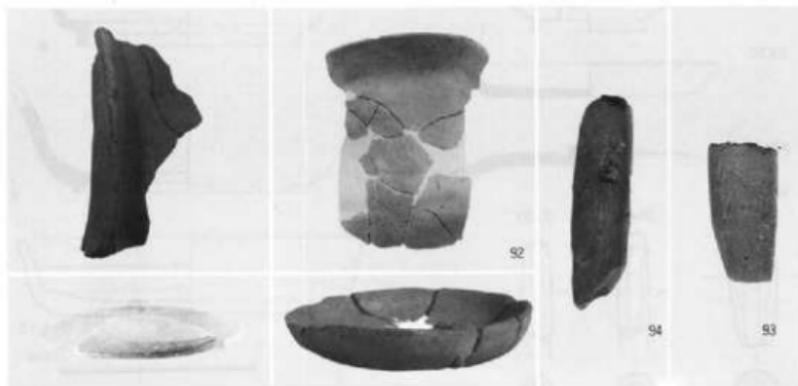
第27图 土城出土遺物実測図④ (縮尺1/3)



第28図 土城出土遺物実測図⑤ (縮尺1/3)

器高1.5cmをはかる。内外面はヨコナデ調整である。83は騎羽口の破片で、他に数点出土している。最大の厚さ2.6cmを測る。外面の一部分はガラス質化している。灰褐色を呈する。

SK70B 出土遺物 (84~92) 84~89は須恵器で、84~86は坏蓋、87~89は高台付坏である。復原高台径は9.6~9.8cmを測る。84~86の復原口径は13.6cm・15.6cm・17.8cmである。85の口縁端部は肥厚させている。90は土師器の皿で、復原口径16cmを測る。胎土・成形は須恵器に似ている。91は甑の把手である。92は甕で、復原口径13cmを測る。胴部内面はタテ方向のヘラケズリを、外面はタテハケ調整である。93・94は土師で、最大径は1.8cm・1.5cm、孔径は0.6cm・0.5cmを測る。94の最大長は6cmである。

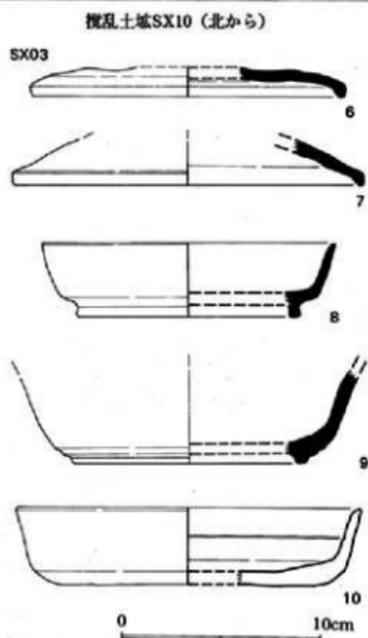
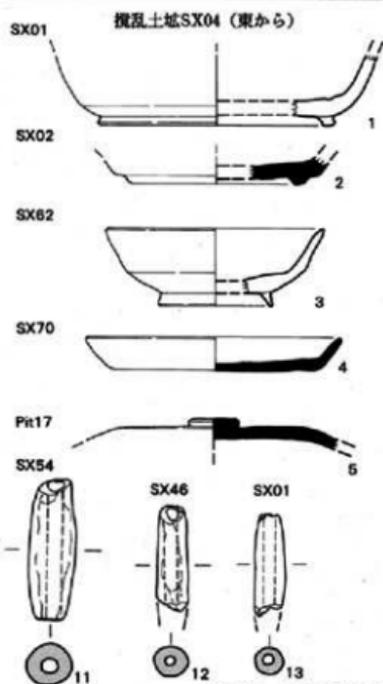


土城出土遺物 ※番号は実測図番号と一致する

4) 攪乱土坑 (SX)

土坑規模が大きいため井戸と想定した土坑の他、攪乱と考えられるものをSXとした。

SX04は平面形が円形状を呈し、最大径140cm、深さ67cmを測る。当初、平面形の状態から井戸



第29図 攪乱土坑内の出土遺物実測図 (縮尺1/3)

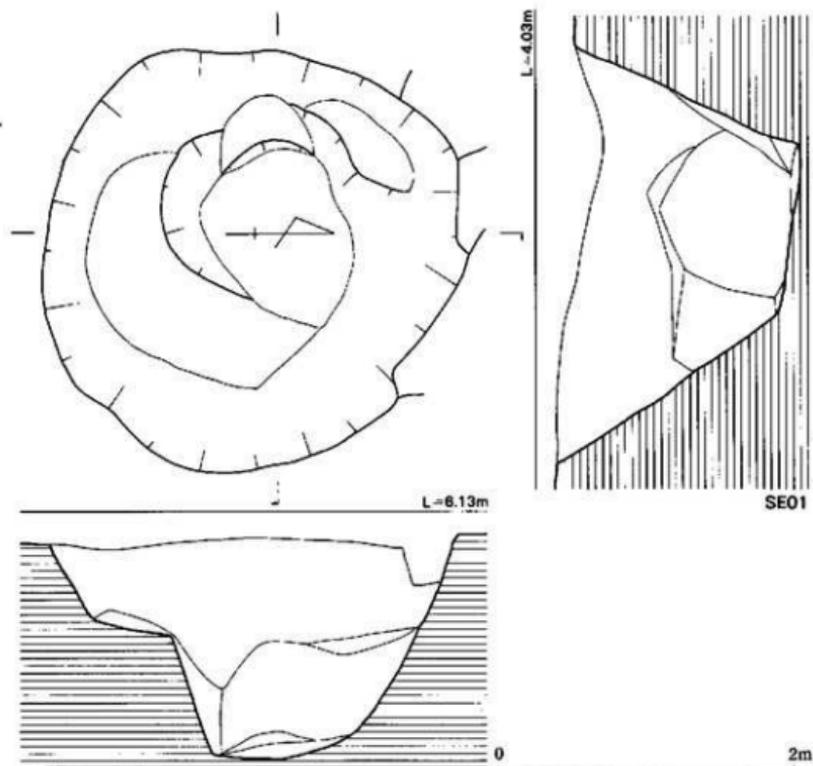
を想定した。SX10は平面形が隅丸長方形を呈しており、規模が大きいため平面形から井戸を想定した。最大長130cm、最大幅150cm、深さ47cmを測る。断面形は底部が丸味をもっている。

5) 攪乱土坑及び pit 出土遺物 (第29図)

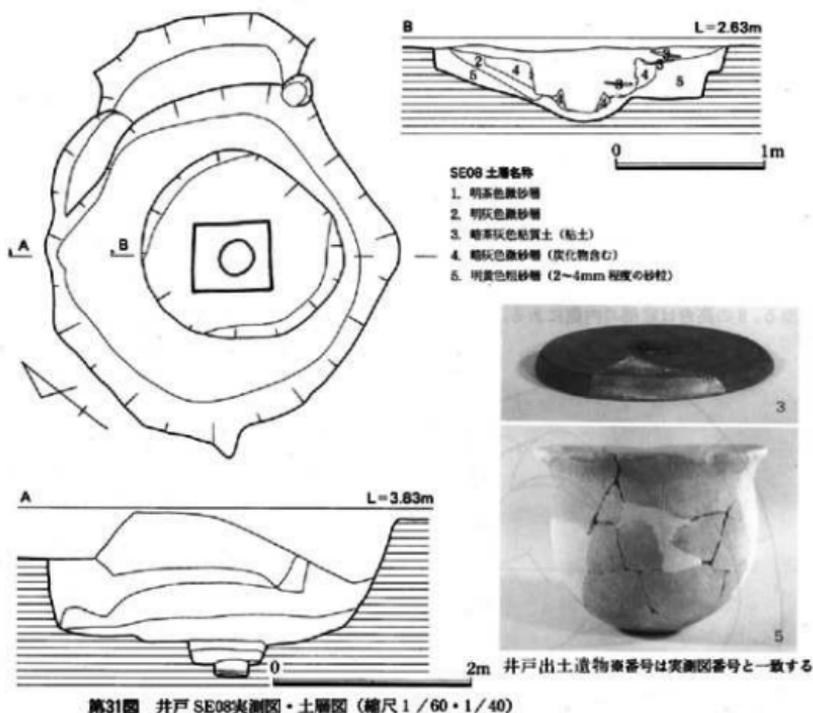
SX01出土遺物 (1・13) 須恵器の高台付坏で高台径は12cmを測る。高台は体部との境にある。13の土鉢は現存長5cm、最大径1.6cm、孔径0.8cmを測る。

SX02出土遺物 (2) 須恵器の高台付坏で、復原高台径は9cmを測る。高台は底部の内側につく。

SX03出土遺物 (6~10) 6~9は須恵器である。6・7の復原口径は15.8cm・17.6cmである。口縁端部を内側に小さく折り曲げている。8・9は高台付坏で、復原高台径は11cm・11.6cmを測る。8の高台は底部の内側にある。10は土師器の坏で、口径17.6cm、器高4cmを測る。体部の



第30図 井戸 SE01実測図 (縮尺1/40)



第31図 井戸 SE08実測図・土層図 (縮尺1/60・1/40)

内外面はヨコナア調整である。

SX62出土遺物 (3) 土師器の高台付坏で、口径11.2cm、器高4cmを測る。底部と体部の境には強い屈折がつく。高台は細く高い。淡茶褐色を呈する。

SX46出土遺物 (12) 土師器である。現存長5.2cm、最大径1.8cm、孔径0.7cmを測る。

SX54出土遺物 (11) 土師器である。現存長7.1cm、最大径2.5cm、孔径0.8cmを測る。

SX70出土遺物 (4) 須恵器の皿で、口径13cm、器高1.7cmを測る。底部外面はナデ調整される。

pit17出土遺物 (5) 須恵器の坏蓋である。つまみは擬宝珠形を呈し、直径2.4cmを測る。

6) 井戸 (第30・31・33図)

奈良時代の井戸の他、戦後に作られたと思われる互井戸が6基がある。互井戸は参考のために図示した。

SE01 (第30図) 素掘りである。平面形は不整形を呈している。最大径は290cm、深さ153cmを測る。掘り方は2段掘りになっている。下段は平面形が不整形で、径140cmを測る。井筒



井戸 SE01 (東から)



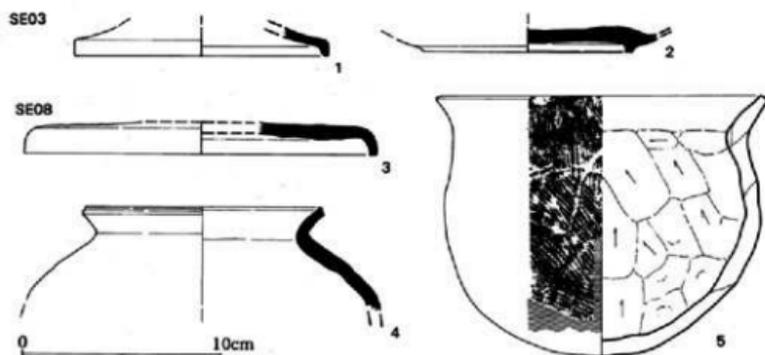
井戸 SE08 (東から)



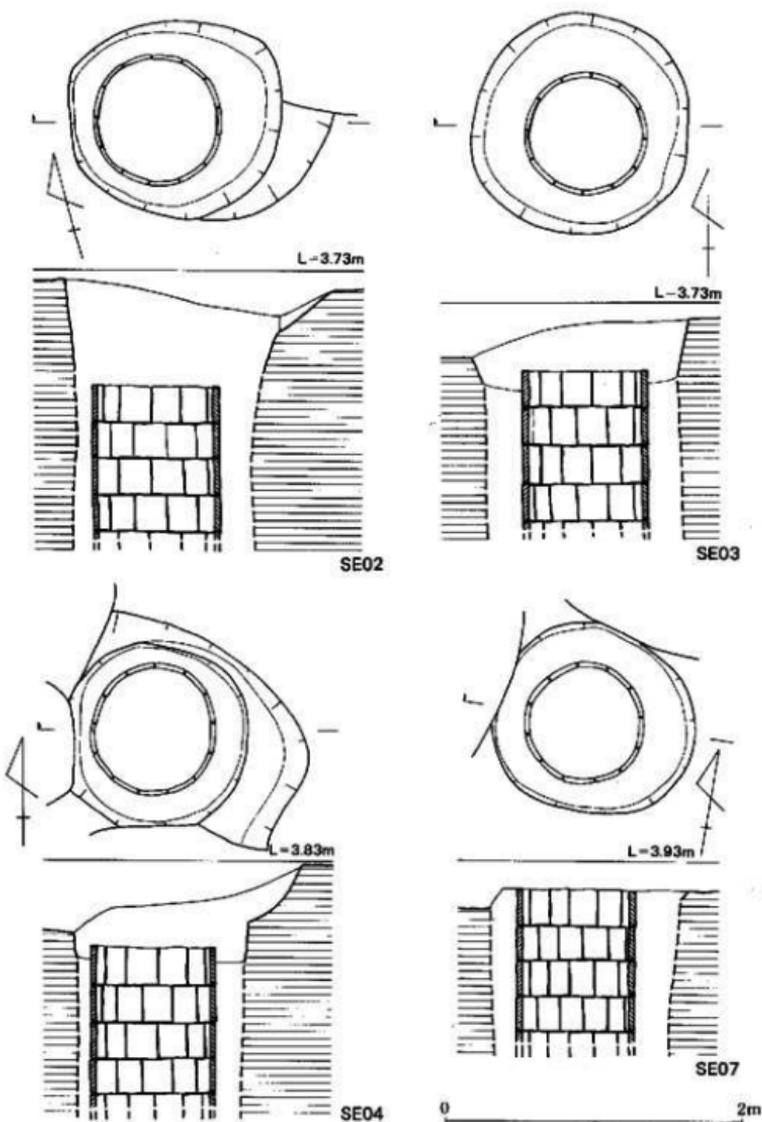
井戸 SE08内曲物 (東から)



井戸 SE08底面の状態



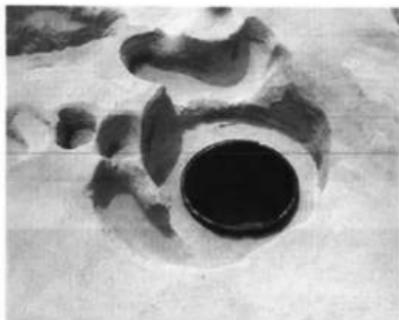
第32図 井戸内出土遺物実測図 (縮尺1/3)



第33圖 瓦井戸 SE02~04・07実測図 (縮尺 1/40)



瓦井戸 SE02 (東から)



瓦井戸 SE06 (東から)

等の施設はない。覆土は暗灰褐色を呈していた。遺物は土師器、須恵器の細片が出土した。

SE08 (第31図) 井戸の掘り方は平面形が不整隅丸方形を呈し、断面形は逆梯形を呈している。最大長370cm、深さ138cmを測る。底面には80cm×70cmの井側を設ける。井側は板材を横方向に組んでおり、高さ18cmまで遺存している。井側の底部中央には、直径35cmの曲物を据えて井筒としている。いずれも腐蝕のため痕跡をとどめるにすぎない。覆土は暗灰色砂質土に、黄色粘質土が混入している。遺物は第43図の3～5の他に須恵器、土師器片が出土した。

SE02～07 (第33図) 瓦井戸である。掘り方はいずれも不整円形を呈している。井筒は直径83～91cmを測る。幅22cm、長さ25cm、厚さ3cmの平瓦を12～13枚組み合わせて構築している。井戸の深さは不明である。初現の瓦井戸は博多遺跡群において検出しているが、その時期は江戸初期に位置づけられる。瓦井戸の構築技術が戦後まで継承されていたことを示す資料である。

7) 井戸出土遺物 (第32図)

1・2はSE03からの出土で、流れ込みの遺物である。3～5はSE08からの出土である。

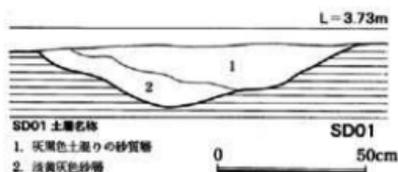
SE03出土遺物 (1・2) いずれも須恵器で、1は蓋、2は高台付坏である。1の復原口径は13cm、2の復原高台径は10.8cmを測る。

SE08出土遺物 (3～5) 3・4は須恵器、5は土師器である。3は蓋で、復原口径18cmを測る。4は甕で、口縁端部を内側へつまみ出している。復原口径12cmを測る。5は口径16.4cm、器高13.2cmを測る。口縁部は小さく、外反している。胴部内面はナナメ方向のヘラケズリを、外面は上位をタテハケ、下位にはヨコハケを施している。焼成は良好で、黄灰色を呈している。

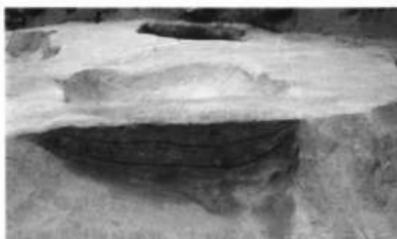
8) 溝 (第34図)

数条の溝を検出したが、奈良～平安時代に属する溝はSD01・05が考えられる。

SD01は東西方向の溝で、幅110cm、深さ35cmを測る。断面形はレンズ状を呈している。遺物は土師の細片にすぎない。SD05は南北方向の溝で、最大長300cmを測る。溝幅は40cmで、深さ17cm



第34図 溝SD01土層図(縮尺1/20)



溝SD01土層状態(東から)



溝SD05(北から)

を測る。断面形はレンズ状を呈している。覆土からの遺物の出土はない。

(6) 小 結

遺跡の時代は前項で述べたように奈良～平安時代を中心として古墳時代～近世までの幅をもっている。遺物には古墳時代の須恵器、土師器、中世前半期の土師器等を検出したが、遺構としては把握できなかった。古墳時代遺物は須恵器編年Ⅲa期以降の時期で、Ⅳ期の7世紀代に及ぶ。奈良～平安時代の遺物は7世紀後半から10世紀中頃までが考えられ、その下限は内黒土器、土師器検に代表される。瓦が出土したSK35・48はいずれも須恵器坏の形状から8世紀前半頃が推定できよう。

従来、この地域では遺跡の発掘調査例が少ないため、聖泊遺跡の実態については不明な点が多かったが、今回の調査によって古墳時代から中世初頭まで生活が営まれていたことが判明した。特に遺物が少ないけれども奈良～平安時代の遺構の存在を明らかにしたことは、西側の博多遺跡群や北東側の宮崎宮を中心とした遺跡群との関連を考えなければならない。遺物のうち、布目瓦や軒平瓦、瓦埴の破片の出土は何を物語るものであろうか。曲物を井筒とした井戸の存在、移動式かまどの出土は庶民の生活跡を物語るものではなく、僧や官吏の住居地域の可能性も考えなければならない。遺跡の中心が旧日本専売公社跡地にあるのは疑問のないところだが、古墳時代～平安時代の遺構がどのように展開されているのか期待のもたれるところである。今回の調査結果が、将来の調査作業への大きな手掛りとなれば幸いである。

Ⅲ 第4次調査の報告

(1) 調査経緯

平成2年度、博多区吉塚一丁目で市営住宅建設に先立って埋蔵文化財事前審査願が上がった。申請地は聖柏遺跡群に含まれ、申請地西側は平成2年5月に市営住宅建設に伴う発掘調査(第3次調査)が行われ、奈良時代～平安時代を主体とした遺構、遺物が検出されている。埋蔵文化財課では同年11月8日に試掘調査を行った。試掘は既存の建物との関係から、東西2本、南北1本のトレンチを設定し、地表下20～40cmの砂丘上に古墳時代～平安時代の遺構、遺物を確認した。この結果を元に建築局と協議し、発掘調査を行うこととなった。

調査は既存の建物解体後の平成2年12月19日に開始し、平成3年3月30日に終了した。調査面積約1600㎡である。

(2) 調査組織

調査委託 福岡市役所建築局

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 井口雄哉

埋蔵文化財課長 柳田純孝(前任)折尾学

埋蔵文化財第二係長 柳沢一男(前任)塩屋勝利

調査庶務 埋蔵文化財第一係 松延好文(前任)寺崎幸男

調査担当 文化財主事 山口譲治

埋蔵文化財第二係 菅波正人

調査作業 石本恭司 上野龍夫 上島茂穂 大塚恵治 大橋善平 岡崇 亀井森 清川朋和 後藤和武 大長正弘 塚別義一郎 徳永静雄 中川敏男 広田熊男 別府俊美 松井一美 柳沢竜広 吉住作美 石川洋子 井手かすみ 岩瀬恵美子 佐々木幸子 篠塚ヒロ子 武田潤子 壇君子 中村フミ子 永松伊都子 西本スミ 野口ミヨ 日尾野典子 平野徳子 星子輝美 宮坂環 森山キヨ子 山口朱美 山崎美枝子

整理作業 有島美江 太田順子 緒方まきよ 松尾秋代 松尾真澄

整理補助 林田憲三(西南学院大学講師)

発掘調査にあたっては建築局住宅改良課の方々には多大な御協力を頂いた。また、調査中は石松好雄氏、山本信夫氏、堀内明博氏に線軸壺に関する御教授を得た。この他、地元の住民の皆様をはじめとして、数多くの方に御協力、御助言を頂いた。記して感謝の意を表したい。

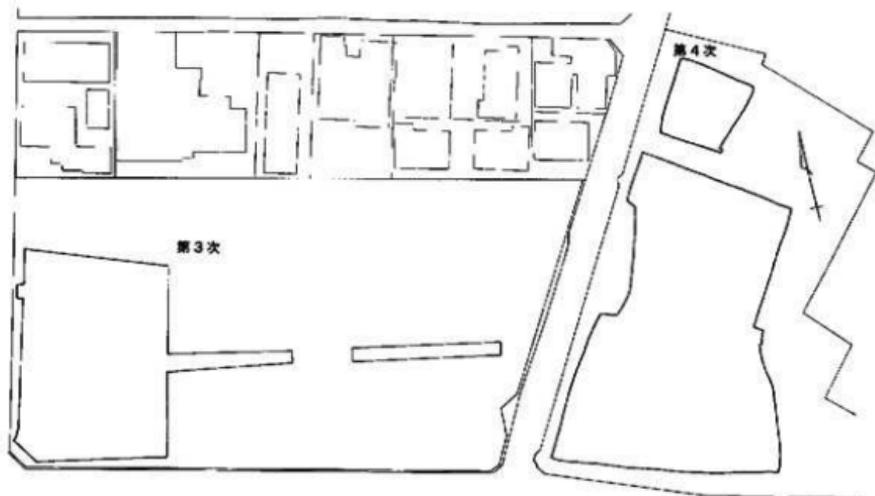
(3) 調査の記録

1) 調査の概要

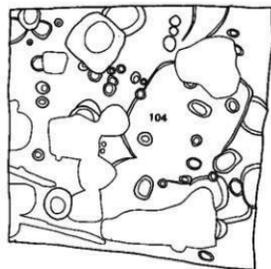
立地 聖粕遺跡群は御笠川の東岸約500mに位置し、博多湾の海岸線に平行して形成された砂丘上に立地する。本調査地点は聖粕遺跡群の東側にあたり、砂丘は調査前の状況は民家が建ち並んでおり、標高約4.5mを測る。

経過 調査は既存の建物の解体後行われた。調査に先立って、開発予定地にあった事務所兼住宅(約150㎡)の移転場所が調査対象地に隣接するため、平成2年12月19日～12月27日にその部分の調査を行った(以下、北側調査区と呼ぶ)。市営住宅の建物部分(以下、調査区と記す時はこの部分を指す)の調査は平成3年1月13日に再開した。調査は先ず、厚さ20～40cmの表土を重機で除去した。表土を除去すると、黄褐色の細砂の地山に遺構が確認できたので、その面を遺構面として人力による遺構検出作業を行った。

遺構・遺物 遺構は古墳時代後期の土壇墓1基、奈良時代～平安時代の竪穴住居跡1軒、土坑64基、土壇墓1基、木棺墓1基、溝6条、柱穴等を検出した。その他、近世の井戸、近現代の屋敷墓、戦争中の防空壕等がある。遺物は古墳時代後期～平安時代の須恵器、土師器、国産陶器(緑釉陶器)、輸入陶磁器(越州窯青磁)、馬具(轡、鐙)、土師等が出土した。



第35図 聖粕遺跡群第4次調査地点周辺測量図(1/1000)



0 20m

聖柏遺跡第4次調査地点遺構配置図 (1/200)



第36図 北側調査区全景（西から）



第37図 調査区遺構検出状況（東から）



第38図 調査区全景（東から）



第39図 調査区全景（西から）

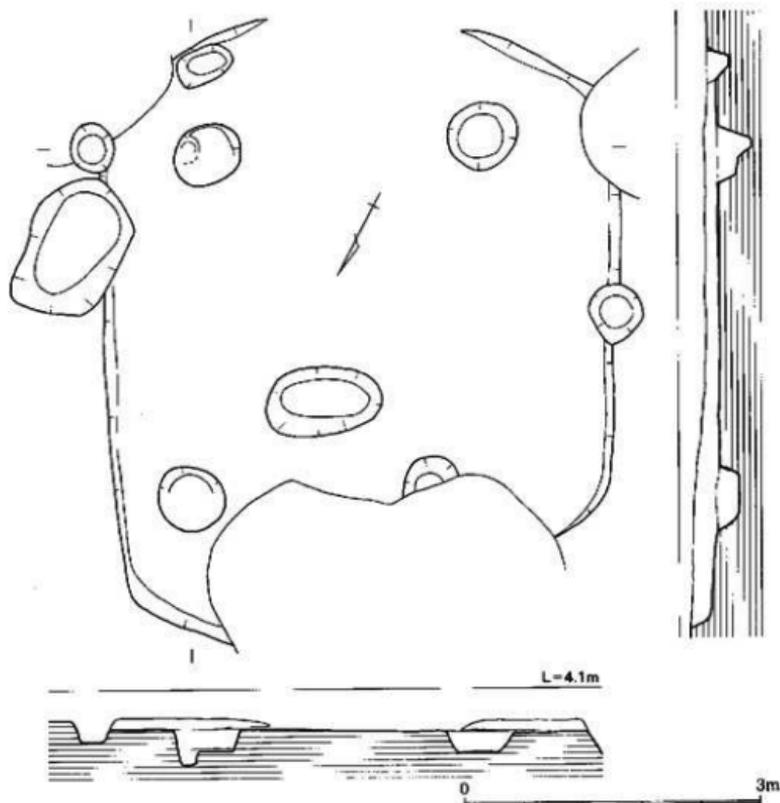
2) 竪穴住居跡 (SC)

SC-104 (第40号)

今回の調査で検出した唯一の竪穴住居跡である。北側調査区に位置する。覆上は黄褐色の細砂で、深さ20cmが残存する。平面形は一部近代の攪乱の削平をうけているが、隅丸方形を呈する。一辺5.1m～6.1mを測る。主柱穴は3基検出したが、攪乱の部分にあと一基存在していたと考えられる。炉や造り付けの竈などは検出できなかった。

遺物は覆土中から須恵器杯、甕、高坏、土師器甕、高坏、甕、土鏝等が出土した。その他、灰釉陶器碗や越州窯青磁碗等も出土した。

遺構の時期は出土遺物にかなりの時間幅が認められるが、須恵器や土師器等から8世紀代に位置づけられるものと考えられる。



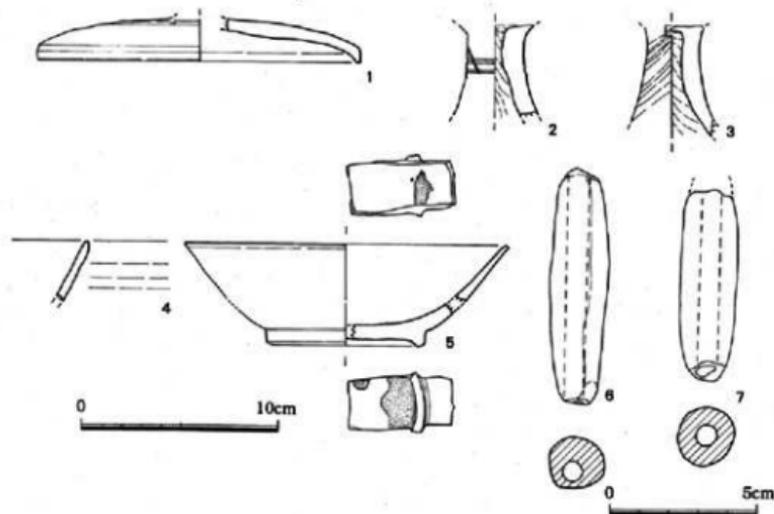
第40図 SC-104遺構実測図 (1/60)

SC-104出土遺物 (第42図1~7)

1~3は須恵器である。1は坏蓋で、口縁端部は嘴状に下垂し、つまみの部分は欠損している。天井部の1/3に回転ヘラケズリが施される。色調は淡灰色を呈する。口径16.1cmを測る。2、3は高坏の脚部で、中央に2条の沈線が通る。調整は外面はヨコナデ、内面にはしぼりの痕跡が見られる。3は内外面にしぼりの痕跡が見られる。2、3とも色調は淡褐色を呈する。4は灰釉陶器碗の口縁片である。胎土は砂粒をわずかに含み、淡灰褐色を呈する。内外面には淡黄褐色の釉が薄くかかる。5は越州窯系青磁碗である。体部は緩やかに内湾する。高台は逆台形を呈する輪状高台である。見込みと高台内側には目跡が残る。胎土は灰色で、釉色は灰色がかかったオリーブ色を呈する。口径16.2cm、高台径8.0cmを測る。6、7は管状土錐で、長さ8.0cm、6.4cm、径2.0cm、1.9cmを測る。



第41図 SC-104完掘 (南から)



第42図 SC-104出土遺物実測図 (1/3、1/2)

3) 土坑 (SK)

今回の調査では64基の土坑を検出した。遺構の時期は奈良時代～平安時代を主体とするものが大半である。いずれの土坑も遺物の出土量は少ない。

SK-001 (第43図)

調査区南西隅に位置し、調査区外に遺構は広がる。平面形は不整形を呈し、長さ約1.8mを測る。覆土は褐色の細砂で、深さ約70cmを測る。断面形はすり鉢状を呈する。遺物は覆土中から散漫に少量出土した。須恵器(坏、甕)、土師器(坏、甕)、瓦等がある。

SK-001出土遺物 (第46図8、9)

8は須恵器の高台付坏である。高台は逆台形で、底部の外寄り、体部との境に付く。色調は灰黒色を呈する。高台径9.0cmを測る。9は平瓦である。端面のみ残存する。凸面には菱形の格子目叩き、凹面には布目が残る。色調は灰色で、焼成は硬質である。

SK-003 (第43図)

調査区南西隅に位置する。遺構は二段に掘り込まれ、平面形は上端は不整形、下端は不整形長方形を呈する。径1.9m～2.1mを測る。覆土は褐色の細砂で、深さ約90cmを測る。遺物は覆土中から散漫に少量出土した。須恵器(坏、甕)、土師器(坏、甕、甗)、黒色土器A類碗、緑釉陶器、瓦等がある。

SK-003出土遺物 (第46図10～17)

10～12は須恵器の高台付坏である。10は底部の外寄りに逆台形の高台が付く。器高3.9cm、口径12.5cm、高台径9.0cmを測る。11は底部の外寄りに逆台形の低い高台が付く。高台外側をヨコナデしているため、体部との境は不明瞭になっている。高台径9.2cmを測る。12は底部の外寄りに逆台形の高台が付く。高台の接地部分はヨコナデによって窪んでいる。高台径11.0cmを測る。13、14は黒色土器A類碗である。底部には外開きで逆台形の高台が付く。15は土師器碗である。底部には細い逆台形の高台が付く。高台径6.9cmを測る。16は緑釉陶器で、蓋の口縁片と考えられる。胎土は暗灰褐色を呈し、釉色はオリーブ色を呈する。17は布目の平瓦で、凸面には格子目叩き、内面には目の粗い布目が残る。色調は灰色を呈する。

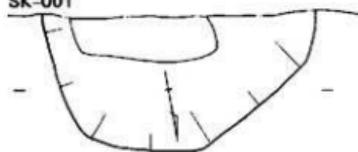
SK-006 (第43図)

調査区南西隅に位置する。平面形は楕円形を呈し、長径0.82m、短径0.55mを測る。覆土は褐色の細砂で、深さ約30cmを測る。断面形は逆台形を呈する。遺物は遺構の上面で土師器高坏が出土している。

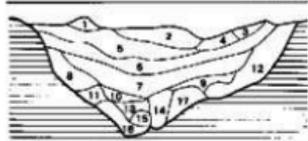
SK-006出土遺物 (第46図18)

18は土師器高坏の脚部である。ラッパ状に裾は開き、端部の内側が接地する。内外面ともヨコナデが施される。色調は淡褐色を呈する。底径8.7cmを測る。

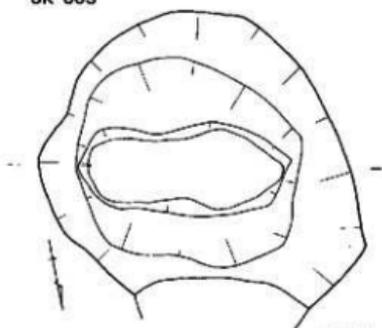
SK-001



L=3.5m

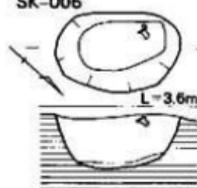


SK 003



L=3.6m

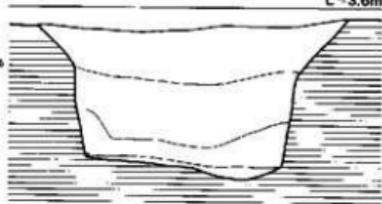
SK-006



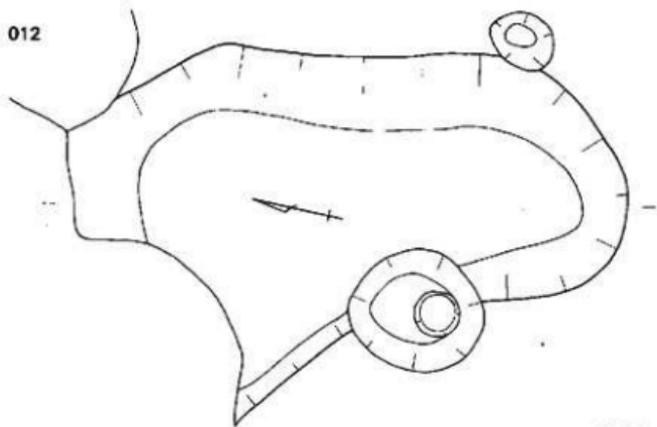
L=3.6m

土層表

- | | |
|-----------------|--------------|
| 1. 黄褐色土 | 13. 灰白色砂 |
| 2. 土質土 | 14. 白砂 |
| 3. 黄褐色土 | 15. 3-層・黄褐色砂 |
| 4. 灰土 | 16. 4-層土 |
| 5. 3-層外縁部 | 17. 6-5層土 |
| 6. 黄褐色土 | |
| 7. 灰土 | |
| 8. 7-層・黄褐色砂 | |
| 9. 广砂 (黄褐色砂) | |
| 10. 黄褐色土 (厚中白土) | |
| 11. 10+ (黄褐色土) | |
| 12. 7+ (黄褐色土) | |



SK 012



L=3.8m



第43圖 土坑 (SK) 遺構実測図1 (1/40)

SK-012 (第43図)

調査区南西隅に位置する。平面形は一部近現代の攪乱によって削平をうけているが、不整楕円形を呈し、長径3.7m、短径1.7mを測る。覆土は淡褐色の細砂で、深さ約60cmを測る。断面形は逆台形を呈する。遺物は覆土中から散漫に少量出土した。須恵器(坏、甕)、土師器(坏、甕)、黒色土器A類碗、瓦等がある。

SK-012出土遺物 (第46図19~23)

19~22は須恵器である。19は犬井部に宝珠つまみが付く蓋である。天井部の1/3以上に回転ヘラケズリが施される。口縁内側にはかえりが付く。器高3.0cm、口径8.1cmを測る。20は坏蓋で、つまみの部分は欠損している。体部は偏平で、口縁は僅かに内側に折れる。口径14.0cmを測る。21、22は高台付の坏である。いずれも高台は低く、高台外側のヨコナアによって体部との境が不明瞭になっている。高台径12.1cm、15.3cmを測る。23は黒色土器A類碗で、逆台形の高台が付く。高台径7.6cmを測る。

SK-021 (第44図)

調査区北側中央に位置し、近世の井戸に切られる。不整楕円形を呈し、長径1.9m、短径1.5mを測る。覆土は淡褐色の細砂で、深さ約60cmを測る。断面形は逆台形を呈する。遺物は覆土中から散漫に少量出土した。須恵器(坏、甕)、土師器(坏、甕)、染付、白磁、国産陶器、肥前系の青磁等がある。近世の遺構と考える。

SK-021出土遺物 (第46図24)

24は肥前系の青磁香炉である。底部には2つの脚が付いているが、本来は3脚であったと考えられる。釉は体部外面と口縁内面にかかり、底面と脚端部、内面は露胎となる。釉色は淡青緑色を呈する。内面には砂目の目跡が残る。器高5.3cm、口径13.1cmを測る。

SK-023 (第44図)

調査区南西隅に位置し、SD-037、038を切る。不整楕円形を呈し、長径1.7m、短径1.5mを測る。覆土は黄褐色の細砂で、深さ約65cmを測る。断面形は逆台形を呈する。遺物は覆土中から散漫に少量出土した。須恵器(坏、甕)、土師器(坏、甕、甗)、黒色土器A類碗等がある。遺構の時期は出土遺物に時間幅があるが、9~10世紀代に位置づけられると考える。

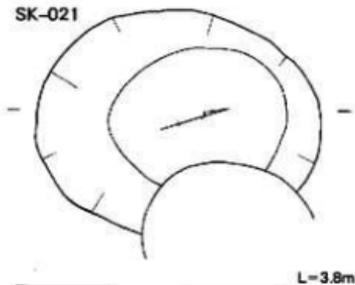
SK-023出土遺物 (第47図25~27)

25、26は須恵器の高台付の坏である。高台は底部と体部との境に、やや開き気味に付く。26は底部にヘラ記号が認められる。高台径9.8cm、9.9cmを測る。27は土師器皿で、底部は穿孔されている。底部の切離しはヘラ切りである。底径6.4cmを測る。

SK-024出土遺物 (第47図28)

28は土師器高坏である。脚はラッパ状に開き、端部は面取りされる。端部内側で接地する。色調は淡黄褐色を呈する。底径9.0cmを測る。

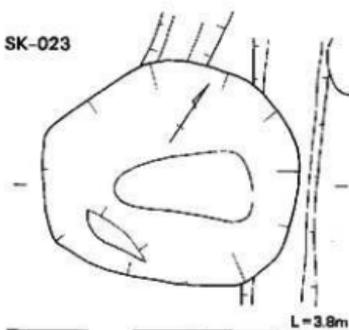
SK-021



L=3.8m



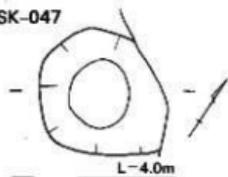
SK-023



L=3.8m



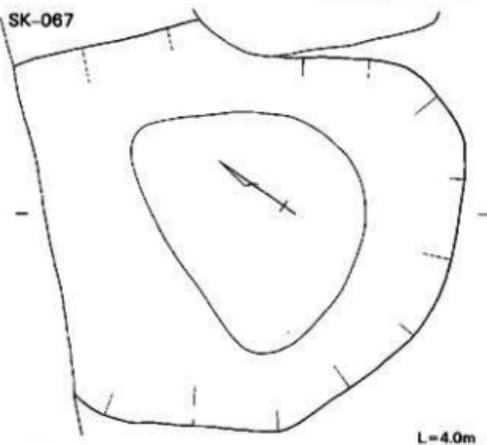
SK-047



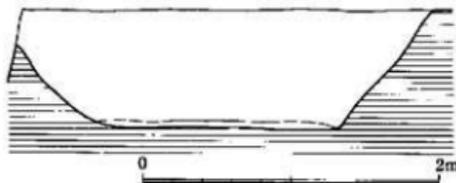
L=4.0m



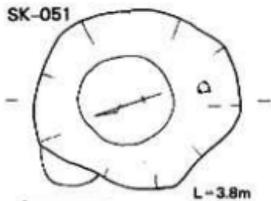
SK-067



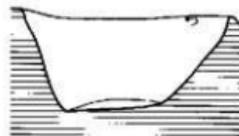
L=4.0m



SK-051



L=3.8m



第44圖 十坑 (SK) 遺構実測図2 (1 / 40)

SK-028出土遺物 (第47図30)

30は土師器小皿である。底部の切離しはヘラ切りで、板状圧痕が残る。色調は淡褐色を呈する。器高1.4cm、口径9.5cm、底径7.0cmを測る。

SK-047 (第44図)

調査区西側中央に位置する。平面形は一部防空濫による削平をうけているが、不整形形を呈し、径0.84m～0.85mを測る。覆土は黄褐色の細砂で、深さ約23cmを測る。断面形は逆台形を呈する。遺物は覆土中から散漫に少量出土した。須恵器(坏、甕)、土師器(坏、甕)がある。

SK-047出土遺物 (第47図31)

31は土師器小皿である。底部の切離しはヘラ切りである。色調は淡褐色を呈する。器高1.2cm、口径9.9cm、底径7.1cmを測る。

SK-051 (第44図)

調査区南西隅に位置する。平面形は不整形形を呈し、径1.2m～1.35mを測る。覆土は褐色の細砂で、深さ約60cmを測る。断面形は逆台形を呈する。遺物は遺構の上面で土師器の甕が出土した。

SK-051出土遺物 (第47図29)

29は土師器の甕の把手である。断面形は円形で、器面には指頭痕が残る。

SK 067 (第44図)

調査区東南隅に位置し、SD-064に近接する。平面形は不整形形を呈し、径2.6m～2.8mを測る。覆土は黄褐色の細砂で、深さ約80cmを測る。断面形は逆台形を呈する。遺物は覆土中から散漫に少量出土した。須恵器(坏、甕)、土師器(坏、甕)、黒色土器A、B類碗、青磁片等がある。

SK-067出土遺物 (第47図32～34)

32は黒色土器A類碗である。底部にはハの字に開く高台が付く。高台径8.7cmを測る。33は土師器碗である。底部と体部との境に逆台形の高台が付く。色調は淡黄褐色を呈する。高台径6.6cmを測る。34は土師器甕である。口縁内外面は回転によるナゲ調整、体部外面は回転ヘラケズリが施される。色調は褐色を呈する。口径15.4cmを測る。体部外面には煤が付着する。

SK-068 (第45図)

調査区東側中央に位置し、SD-017を切る。平面形は不整形形を呈し、径0.88m～0.94mを測る。覆土は褐色の細砂で、深さ約60cmを測る。断面形はすり鉢状を呈する。遺物は覆土中から緑釉陶器片が1点出土した。

SK-074 (第45図)

調査区東側中央に位置する。平面形は楕円形を呈し、長径1.65m、短径1.24mを測る。覆土は褐色の細砂で、深さ約60cmを測る。断面形はすり鉢状を呈する。遺物は覆土中から散漫に少

量出土した。須恵器（坏、甕）、土師器（坏、甕）、黒色土器 A 類碗等がある。

SK-074出土遺物（第47図35）

35は土師器碗である。底部にはハの字開く高台が付く。色調は淡茶褐色を呈する。高台径8.9cmを測る。

SK-014出土遺物（第47図36）

36は管状土鍾である。長さ7.7cm、最大径2.0cmを測る。

SK-018出土遺物（第47図37）

37は管状土鍾である。長さ9.2cm、最大径3.2cmを測る。

SK-032出土遺物（第47図38）

38は管状土鍾である。一方が欠損している。長さ5.0cm、最大径2.0cmを測る。

SK-043出土遺物（第47図39）

39は管状土鍾である。一方が欠損している。長さ4.1cm、最大径2.3cmを測る。

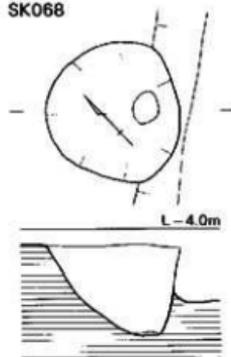
SK-065出土遺物（第47図40）

40は石製紡錘車である。器面には擦痕が残る。径4.2cm、厚さ1.0cmを測る。石材は結晶片岩を使用する。

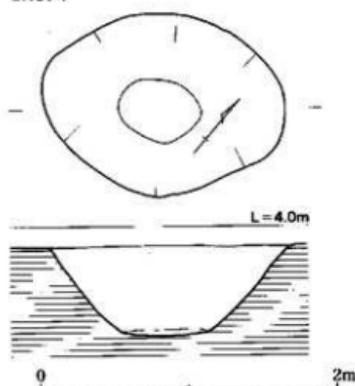
SK-105出土遺物（第47図41）

41はつまみ付の滑石製品である。つまみの断面形は台形を呈し、中央に穿孔が施される。器面には擦痕が残る。高さ2.2cm、幅2.2cmを測る。

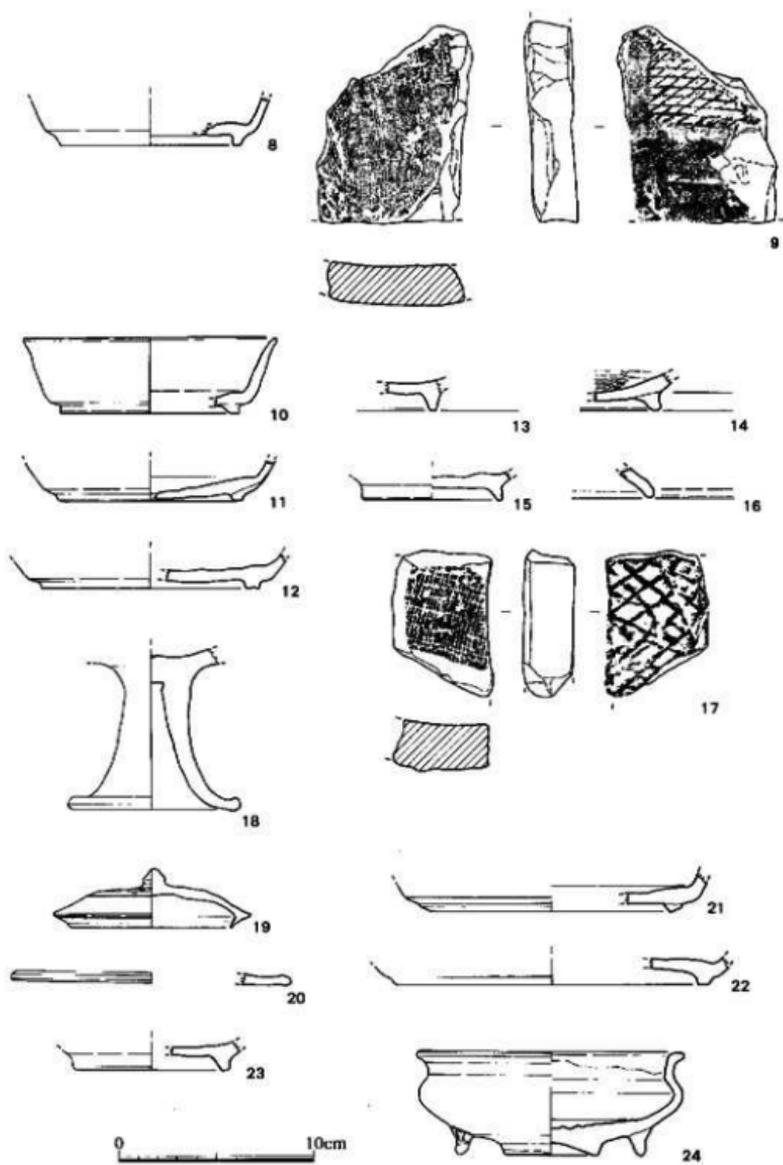
SK068



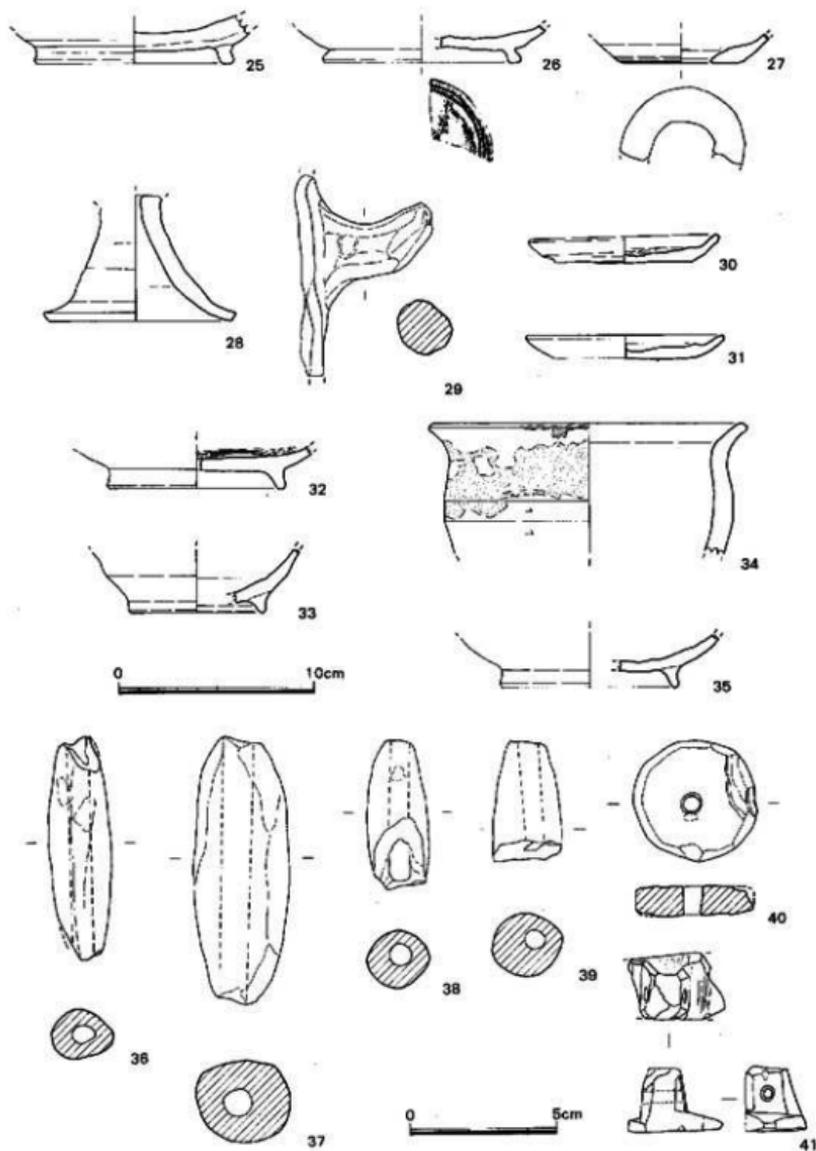
SK074



第45図 十坑（SK）遺構実測図3（1/40）



第46图 土坑 (SK) 出土遺物実測图 1 (1/3)



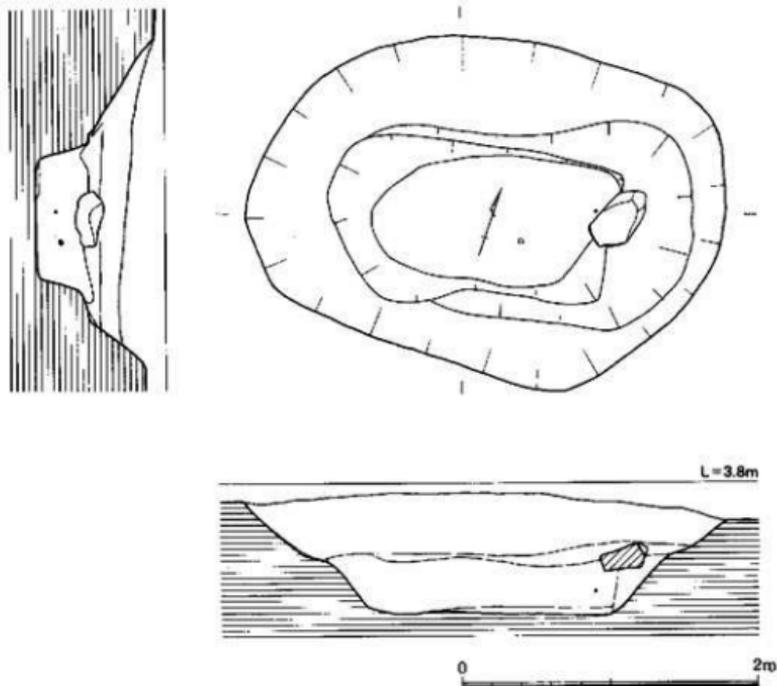
第47圖 土坑 (SK) 出土遺物実測圖 2 (1/3、1/2)

4) 墓 (SX)

今回の調査では6基の墓を検出した。そのうち、3基は近現代の墓である。3基はいずれも木棺墓で、法量は70~100cm×140~160cmを測る。頭位は北東方向をとる。人骨等は残存していなかった。副葬品はほとんど見られなかったが、SX-035の棺内には足元に当たる部分にハマグリ(ハマグリ)の殻が一枚供えられていた。

SX-030 (第48図)

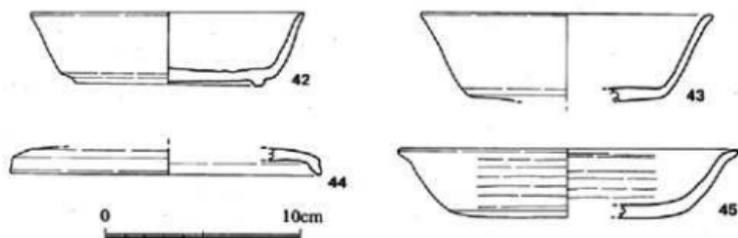
調査区中央北側に位置する。墓墳は2段に掘り込まれ、中に木棺が置かれたものとする。墓墳内に釘などが見られないことから、組合せ式の木棺と推測する。棺の小口の一方の上面には人頭大の礫が置かれていた。棺蓋の抑えとも考えられる。遺物は礫の上面で供献(くけん)土器と考えられる完形の須恵器(すゑぎ)杯(はい)を検出した。その他、墓墳内から土師器(とじぎ)・須恵器(すゑぎ)・焼土塊(やけど)等が出土した。土師器の中には墨痕(すみあと)のある破片が1点ある。掘り方3.25m×2.3m、棺1.95m×1.0m、深さ約90cmを測る。主軸方位はN-71°-Eをとる。遺構の時期は8世紀代に位置づけられる。



第48図 SX-030遺構実測図(1/40)

SX-030出土遺物（第49図42～45）

42は碟の上面、43～45は墓墳内から出土した。42～44は須恵器で、42、43は坏身、44は蓋である。42は体部が直線的に立ち上がり、底部外寄りに低い高台が付く。底部にはヘラ切り未調整である。器高3.6cm、口径13.8cm、高台径9.6cmを測る。43は体部が直線的に立ち上がる。内外面、底部に回転ナデが施される。高坏の坏の可能性もある。色調は淡橙色を呈する。口径14.8cmを測る。44は口縁端部は嘴状に下垂する。口径15.8cmを測る。45は土師器丸底坏である。器面の内外面は回転ヘラミガキ、底部は回転ヘラケズリが施される。口径17.2cmを測る。



第49図 SX-030出土遺物実測図（1/3）



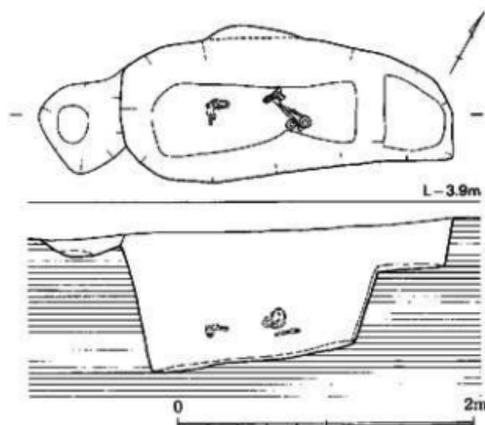
第50図 SX-030完掘（東から）

SX-034 (第51図)

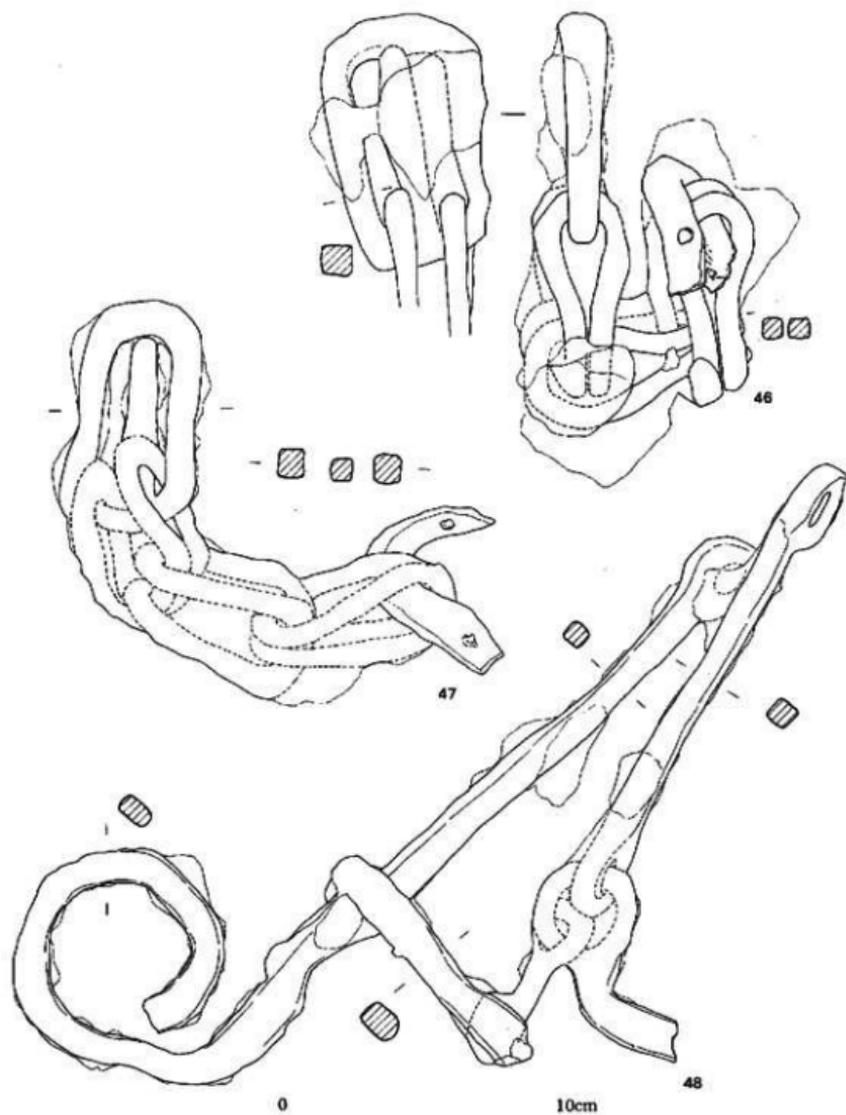
調査区中央北側に位置する。平面形は一部攪乱をうけているが、不整長方形を呈する。墓墳は二段に掘り込まれている。覆土は黄褐色を呈する。墳底は一方が高くなっており、高い方が頭位と考えられる。遺物は墳底から20cm程浮いた位置で、鉄製の轡1個と鏡2個を検出した。人骨などは検出できなかった。長さ2.25m、幅0.95m、深さ約90cmを測る。主軸方位はN-60°-Eをとる。遺構の時期は土器が出土していないため決めがたいが、6～7世紀代に位置づけられるものとする。

SX-034出土遺物 (第52図46～48)

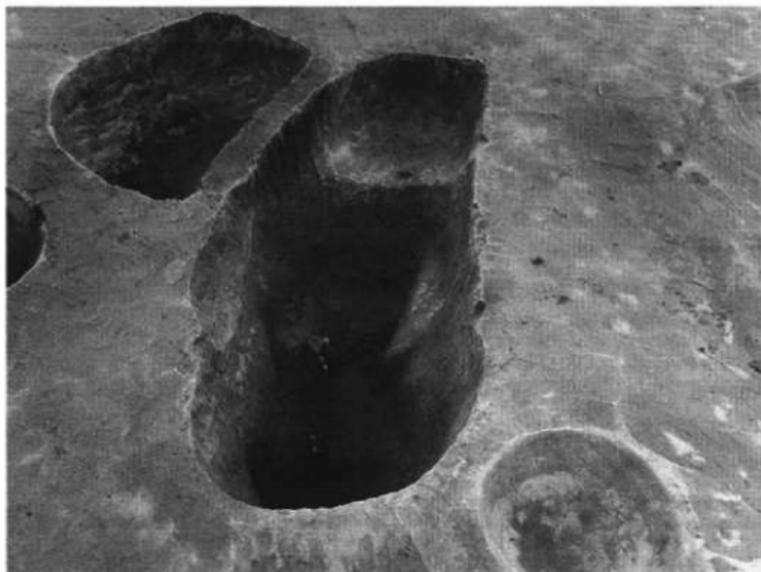
46、47は絞具・兵庫鎖・鏡の緑金具である。絞具は中央が若干くびれる隅丸長方形を呈する。断面形は方形を呈する。46の方が若干大きい。長さ約8.5cm、8.0cm、幅約5.5cm、4.0cm、厚さ約1.0cm、0.9cmを測る。兵庫鎖は三連で、1つの環の長さ約7cmを測る。断面形は方形で約0.8cmを測る。兵庫鎖の一方は絞具に取りつき、もう一方は鏡の緑金具に取りつく。緑金具は先端が欠損しており、全長は不明であるが、幅約2cm、厚さ約0.2cmを測る。緑金具には紙が残存しており、紙に木質が付着していることから木製の壺鏡であったと考えられる。48は轡である。鏡板は一方が欠損している。円形を呈する鏡板の一方が延びて円環となり、その部分に引手と馬銜が取りつく。断面形は1.0×0.6cmの楕円形を呈する。馬銜は2連で長さ約16cmを測る。断面形は1.2×0.8cmの楕円形を呈する。引手は約18cm測り、断面形は1辺0.8cmの方形である。



第51図 SX-034遺構実測図 (1/40)



第52图 SX-034出土物实测图(1/2)



第53図 SX-034遺物出土状況（西から）



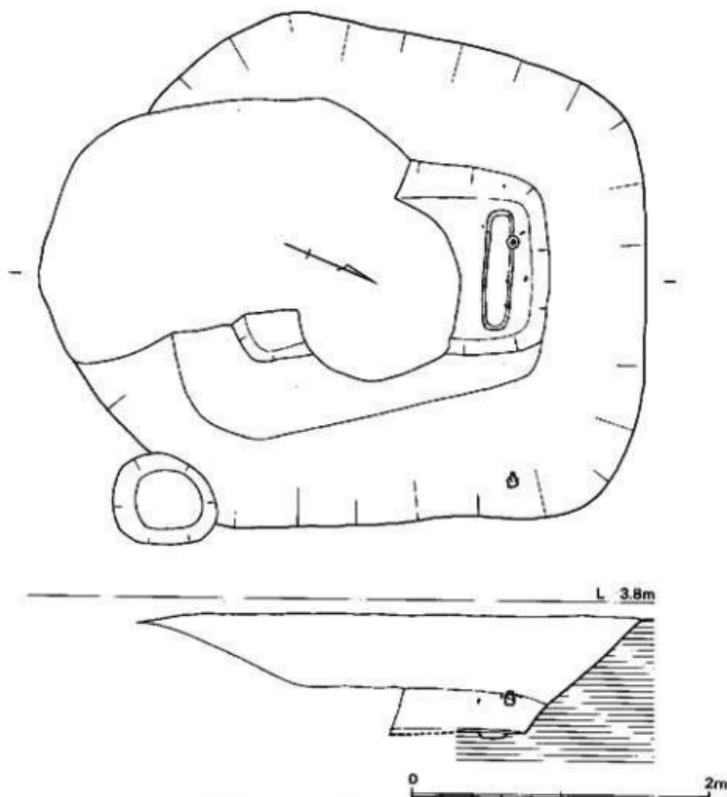
第54図 SX-034遺物出土状況（南から）



第55図 SX-034完形（東から）

SX-036 (第56図)

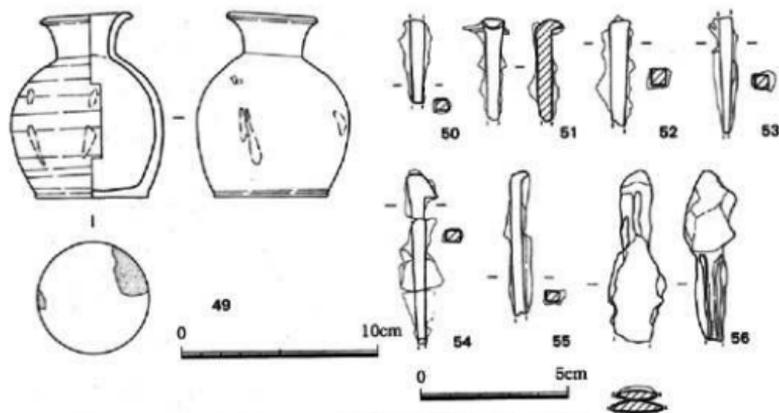
調査区中央南側に位置し、SD-038を切る。遺構の大部分は攪乱をうけているが、掘り方の平面形は方形を呈する。墳内からは墳底より約30~40cm浮いた位置で、釘が出土している。また、墳底の短軸側に一段掘り込まれていた部分があり、主体部は組合せの木棺と考えられる。釘は墳内の小口側の浮いた位置でしか検出できなかった。従って、釘は棺蓋にのみ使用されたと考える。覆土は黄褐色を呈する。遺物は小口側の墳底から30cm程浮いた位置で、緑軸緑彩壺が出土した。出土状況から棺上に置かれたものと考えられる。人骨などは検出できなかった。その他、覆土中から須恵器(坏)、土師器(坏、甕)の細片が少量出土した。掘り方4.1m×3.5m、棺幅60~80cm、深さ約70cmを測る。主軸方位はN-22°-Wをとる。遺構の時期は副葬の小壺等から、10世紀代に位置づけられるものと考えられる。



第56図 SX-036遺物実測図 (1/40)

SX-036出土遺物 (第57図49~56)

49は緑軸緑彩壺である。口縁は緩やかに外反し、口頸部はラッパ状を呈する。肩部はなで肩で、底部は平底である。体部と底部との境に段がつく。調整は口縁内外面はヨコナデ、体部外面下半は回転ヘラケズリが施される。底部の切離しは回転糸切りである。胎土は微砂をわずかに含み、淡い黄灰色を呈する。やや軟質である。外面全面と口縁内面には灰緑色～緑色を呈した釉がかけられるが、肩部から体部下半にかけて、濃緑色を呈する釉が筋状に4ヶ所かけられる。内面には部分的に垂れた釉が見られる。底部には目跡が残る。器高9.2cm、口径4.8cm、底径5.8cmを測る。50~55は釘で、いずれも欠損している。断面は方形である。56は釘か。



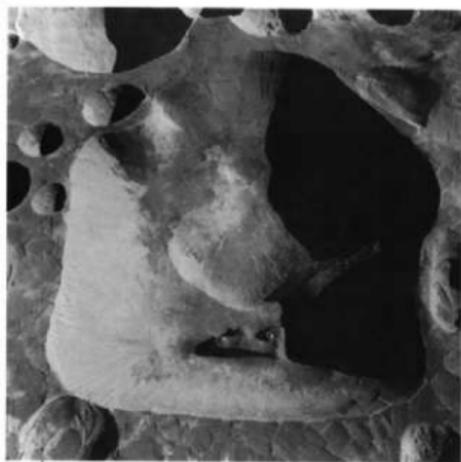
第57図 SX-036出土遺物実測図 (1/3、1/2)



第58図 SX-036出土遺物



第59図 SX-036完掘 (北から)



第60図 SX-036遺物出土状況 (北から)



第61図 SX-036出土遺物 (北から)

5) 溝 (SD)

今回の調査では7条の溝を検出した。近現代の攪乱によって切られているものが多い。

SD-017

調査区東側中央から直線的に東西方向に延び、調査区中央ではほぼ直角に南に折れる。南端は攪乱に切られているため、更に延長するかは不明である。SK-068、SD-019等に切られる。SD-017は途中攪乱によって寸断されているが、東西長約23m、南北長約25mを測る。幅は約60cm～120cm、深さ約20cm～40cmを測る。溝の走行方位は東西溝N-約35°-W、南北溝N-約30°-Eをとる。遺物は覆土中から散漫に少量出土した。須恵器(坏、甕)、土師器(坏、甕)、黒色土器A、B類碗、瓦等がある。

SD-017出土遺物 (第64図57～62)

57、58は土師器坏である。底部の切離しはヘラ切りである。色調は淡褐色を呈する。57は器高1.9cm、口径13.7cm、底径10.0cmを測る。外面には煤が付着する。58は底径8.0cmを測る。59～61は土師器碗である。高台は断面逆台形で、60は外側に踏ん張る。62は黒色土器B類の托上碗である。脚の部分は欠損している。内外面とも丁寧なヘラミガキが施される。

SD-019

調査区南西を直線的に東西方向に延びる。両端は更に調査区外に延びる。SD-017、SD-025、SD-037を切る。SD-019も途中攪乱によって寸断されているが、東西長約24m、幅は40cm～70cm、深さ約20cm～30cmを測る。溝の走行方位はN-約45°-Wをとる。遺物は覆土中から散漫に少量出土した。須恵器(坏、甕)、土師器(坏、甕)、国産陶器(すり鉢)等がある。

SD-025

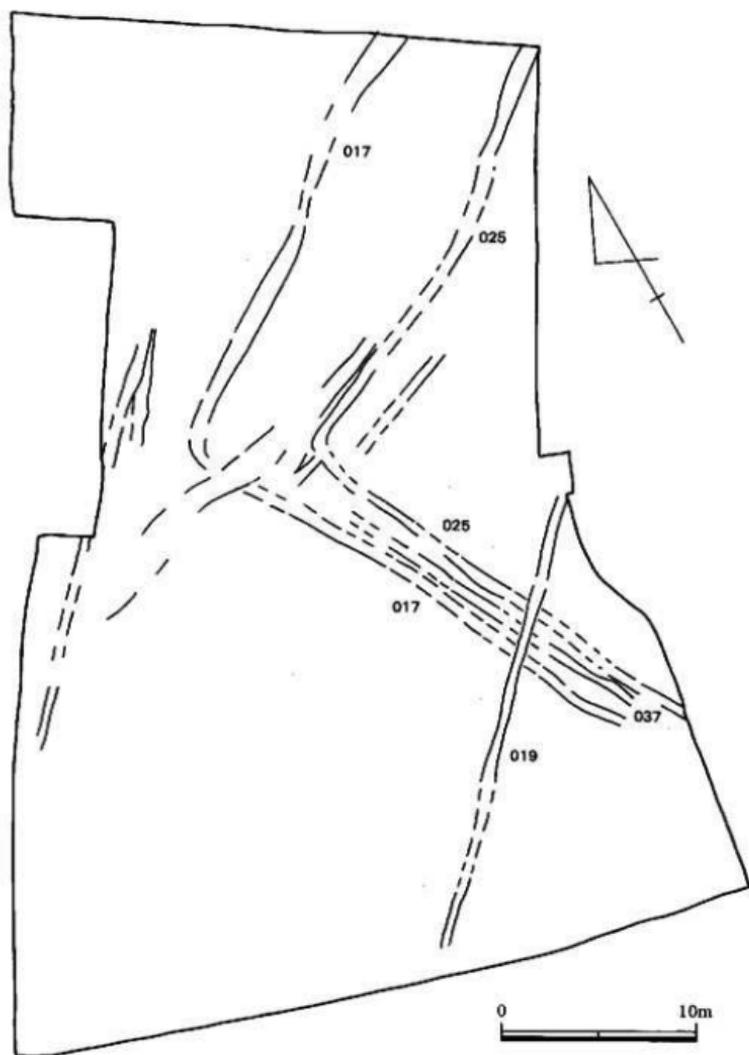
SD-017と同様、調査区東側中央から直線的に東西方向に延び、調査区中央ではほぼ直角に南に折れる。南端は更に調査区外に延びる。SD-019、SX-036、SK-066等に切られる。SD-025は途中攪乱によって寸断されているが、東西長約23m、南北長約23mを測る。幅は約50cm～100cm、深さ約20cm～50cmを測る。溝の走行方位は東西溝N-約34°-W、南北溝N-約25°-Eをとる。遺物は覆土中から散漫に少量出土した。須恵器(坏、甕)、土師器(坏、甕)、瓦等がある。

SD-025出土遺物 (第63図63)

63は須恵器坏蓋である。天井部の1/3に回転ヘラケズリが施される。口径11.8cmを測る。

SD-037

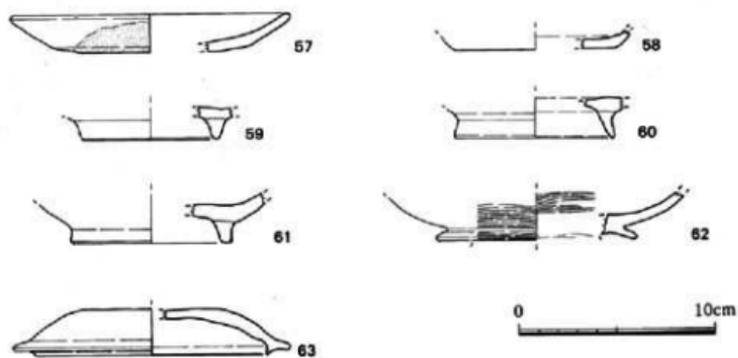
調査区南側中央に位置し、SD-017、SD-025の間を南北方向に延びる。北端は攪乱に切られているが、SD-017、SD-025と同様、鋸形に折れるものと考えられる。南北長約15m、幅は約30cm～40cm、深さ約20cm～30cmを測る。溝の走行方位はN-約27°-Eをとる。遺物は散漫に少量出土した。須恵器(甕)、土師器(甕、甕)等がある。



第62圖 溝 (SD) 造構配管図 (1/300)



第63図 SD-017、019、025、037完掘（北から）



第64図 SD-017、025出土遺物実測図（1 / 3）

(4) 小 結

今回の調査では古墳時代から近世にかけての遺構・遺物を検出したが、それらの主体は奈良～平安時代を中心とした遺構、遺物である。遺構面が現地表から浅く、攪乱が多いため、遺構の遺存状態が良くない。そのため、ほとんどの遺構が攪乱をうけていて規模や出土遺物に不明確な部分が多い。ここでは今回の調査で得た成果と問題点について記述していく。

古墳時代

今回の調査では黒曜石剥片が1点出土したが、これ以外には縄文、弥生時代の遺物はなく、遺跡の上限は古墳時代である。この時期の遺構としてはSX-030がある。調査区中央で検出した土壌墓で、墳内から甕、銜が出土した。土壌墓の周囲には溝などはない。この遺構からは馬具以外の遺物はなく、時期を決めたいが、6～7世紀代の遺構と考えられる。この時期の上墳墓で、馬を埋葬した例が幾つか見られるが、今回の例は骨等が出土していないため、可能性だけを指摘しておく。このほか、遺物としては包含層から6世紀後半から7世紀にかけての須恵器などが出土したが、明確な遺構はなく、この時期の遺構は別平されてしまったものとする。

奈良、平安時代

今回検出した遺構はほとんどこの時期に属する。

竪穴住居跡は1基検出した。北側調査区に位置し、1辺5.1～6.1mの隅丸方形プランを呈する。遺構はかなり攪乱をうけているが、支柱穴は4本と考えられる。住居内には造り付けの竈は検出できなかったが、移動式の竈が出土しており、竈は設置されてなかったと考える。木棺墓は2基検出した。SX-030は8世紀前半代に位置づけられる。棺内から副葬品は見られなかったが、墓壇の掘り方の上面で須恵器坏が出土した。SX-036は木棺墓で、副葬品として、緑釉緑彩の小壺が出土した。この壺の類例としては太宰府史跡等に幾つか見られるが、数少ない資料である。時期は共存遺物が少ないため、明確には決めたいが、概ね10世紀代に位置づけられる。溝は7条検出した。いずれも攪乱をうけていて遺存状態は良くないが、溝の方向や遺物などから時期的に2期に分けられる。1期はSD-017、025、038で、鏡形に折れる溝である。溝の規模や形状から何らかの施設を区画する溝と考えられる。2期はSD-019で、SD-017、025、038等を切る。また、調査区北端にも同様の規模、方向の溝があり、同時期のものと考えられる。これらの溝は遺物が少ないため時期を決めたいが、遺構の切り合い等から10世紀代に位置づけられる。このほか、遺物としては越州窯系青磁、緑釉陶器、墨書土器等が出土しており、一般集落とは様相が異なる。今回の調査では建物等は検出できなかったが、何らかの公的な施設が存在した可能性はある。今後の周辺の調査が待たれる。

堅 粕 1

福岡市埋蔵文化財調査報告書第274集

1992年3月13日

発行：福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷：株式会社川島弘文社

福岡市東区箱崎埠頭6丁目6番41号
